

京都大学 人文科学 研究所

2019

人文科学研究のフロンティア

目次

ごあいさつ……………1

人文科学研究所は何をめざすか

21世紀人文科学のフロンティア……………2

制度の流れ—沿革……………4

研究組織……………6

研究者一覧……………8

外国人研究者の招へい……………13

共同研究と共同利用……………14

課題公募班（共同研究A班）の10年……………16

共同研究一覧……………19

附属研究施設

東アジア人文情報学研究センター……………34

現代中国研究センター……………36

所蔵コレクション……………38

教育活動・社会貢献

若手研究者の育成……………40

人文研アカデミー……………42

教育への貢献……………44

TOKYO漢籍SEMINAR……………45

受賞者一覧……………41

出版物・著作……………46

施設……………48

ごあいさつ



京都大学人文科学研究所(人文研)は、本年、創立90周年を迎えます。1929年に外務省が設立した東方文化学院京都研究所(のち東方文化研究所に改称)がはじまりで、1934年に民間団体が設立した独逸文化研究所(のち西洋文化研究所に改称)と1939年に京都帝国大学が設置した人文科学研究所の3研究所が1949年に合併し、人文研が新たに発足しました。この70周年になる新体制のもとでは「世界文化に関する人文科学の総合研究」を目的として、哲学・史学・文学という伝統的な人文学の枠組みを越え、芸術学・人類学・社会学・心理学などの関連分野のほか、法学・経済学などの社会科学、さらには科学史・生態学・情報工学など理系分野の研究者をスタッフに加え、現在は人文学・東方学の2研究部と東アジア人文情報学・現代中国の2附属研究センターから構成されています。

人文研を特色づける共同研究は、学内外の研究者・PD・大学院生たちと連携し、古典文献の会読、フィールド調査、そして相互討論を通じて考察を深める共同研究を毎週や隔週という頻度で開催することにより、数多くの重厚な研究業績を積み重ねてきました。それらは多民族・多文化間の調和ある共生に資する学術的知見として、国内外から高く評価されてきたところです。また、漢籍をはじめとする東洋学関係図書のほか、漢字の起源となった殷代甲骨や中国歴代の石刻拓本、雲岡石窟やガンダーラ仏教遺跡に関する学術調査資料など、質量ともに世界屈指の学術資源を保有し、研究者の共同利用に供してきました。

このような実績をもとに、人文研は2010年より全国共同利用・共同研究拠点の「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」として文部科学省に認可されました。共同研究の伝統を継承しつつ、学術コミュニティの要望を拠点の運営に反映させるため、学外委員が半数以上を占める運営委員会と共同研究委員会を設置し、いっそうの機能強化に努めています。2018年には課題公募型の共同研究班を拡充し、40歳未満の若手研究者を班長とする研究班と、外国人研究者や客員教員などが主宰する国際研究ミーティングを新設しました。また、東アジア人文情報学研究センターのWebサイトで公開している所蔵石刻拓本資料(拓本文字データベース)は2018年度に2,400万件のアクセスがあり、全国漢籍データベースや東方学デジタル図書館などを含めると、一日あたり平均32万件あまりにおよんでいます。

京都大学は2017年に「指定国立大学法人」に指定され、「特に我が国の人文社会科学を牽引することが期待され」ています。これをうけて人文研は、かねてより推進してきたオープンサイエンスを基礎に、さらに国内外の研究機関とも連携してさまざまな学術情報を共有化し、国際的に活用できる学術資源アーカイブを構築する計画を進めています。これまで以上のご支援とご協力をたまわることができれば幸いです。

2019年6月27日

京都大学人文科学研究所・所長 **岡村秀典**



21世紀人文科学のフロンティア

現在、人文科学は大きな転機を迎えている。生命科学の発展や、認知科学、情報科学の進歩は、人間についての認識を大きく変えつつあり、その一方で、海洋プラスチックなど環境問題が端的に示しているように、人間と自然の関係を問い直すことも要請されている。また、これまで世界の諸文化を考察する枠組みは、おもに国民国家によって規定されてきたが、その問題性もあらわになってきている。こうしたなか、人文科学の全領域で新たな課題が生まれ、従来の専門分野の設定やそこで前提とされてきた視点や方法が根本的な再検討を迫られることになってきた。しかし、人文科学に期待されている役割は大きく、とくに近代世界を形づくってきた諸価値や技術的達成が内包する問題が噴出している今日、人間の生き方とその歴史的展開を明らかにし、そのあるべき姿を研究する人文科学の重要性はますます増大している。京都大学人文科学研究所は、90年にわたって蓄積されてきた成果の上に立ちつつ、現代の人文科学が直面する諸課題に取り組もうとしている。その根幹をなすのが、共同研究とフィールドワークである。

共同研究 — 知の協働

共同研究は今や各分野で広く行われているが、毎週ないし隔週の高頻度で多様な専門領域の班員が集まって文献の解説や研究報告、討論を積み重ね、3～5年程度の期間をかけた末に論文集や校訂テキスト、訳注などを公刊して研究成果を社会に還元する——こうしたスタイルを先駆的に確立し、その有効性を国際的に認知させたのは人文科学研究所である。

人文科学研究所は、人文学の広い領域を対象とする「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」として文部科学省に認定された。人文学の基礎的研究を踏まえつつ、世界的視野から複数文化の生成・変動・相互交渉などを研究し、地球社会の調和ある共存に資する学術的知見を提供することを目的に掲げ、研究者コミュニティに開かれた共同利用・共同研究拠点としての活動を展開している。

人文科学研究所の共同研究には、京都大学内外の多くの研究者が参加し、重要な役割を果たしてきた。近年では、海外の研究者を交えて国際共同研究を遂行する班も増えている。地球規模の課題に地球規模で取り組むこと

が求められる時代に、グローバルな研究ネットワークのハブとして、人文科学研究所の共同研究が担う責務はますます大きくなっているといえよう。人文科学研究所は今後も共同研究の体制を強化し、より広い視野からの議論と綿密な分析を重ね合わせることで、新たな研究成果を生み出すことをめざしている。

フィールドワーク — 知の探査

わが国における組織的な海外学術調査は、旧東方文化研究所や統合後の人文科学研究所によって切り拓かれてきたと言っても過言ではない。そこでは戦前・戦後にわたって、中国、南アジア、中央アジア、アフリカ、ヨーロッパの各地において考古学や人類学に関する多様な調査が遂行され、経験と実績が蓄積されてきた。

現在では、海外でのフィールドワークや文献調査が日常的かつ多様な方法で行われるようになったため、大規模な調査隊の派遣というスタイルはとらず、海外の研究者との国際的な共同プロジェクトの一環として、個々の構成員がフィールドワークに携わることが多い。また文献資料についての知見と新出資料とを相補的に用い、文明地域の研究を進めるという手法も一般的になってきている。人文研でも、調査、発掘蒐集、分析、精読といった研究のさまざまな側面を縦横に組み合わせ、真に世界水準に立つ研究成果をあげることをめざしている。また、過去のフィールドワークで得られた膨大な資料のオープン化という課題にも積極的に取り組み、データベースの作成を進めつつある。

共同研究やフィールドワークは、個々の研究者の知性が互いに出会いぶつかり合うことで新たな展望を開くための重要な契機を提供する。グローバル化とローカル化とが並行して進行しつつある複雑な現代社会において、多様な問題を解決するための叡智が生み出される一つの背景は、このような知の邂逅と触発であろうが、それが真に用に堪えるものであるかどうかは、常に実際のフィールドにおいて試され磨かれねばならない。このような知の円環構造を通じてさらなる思索の発展と深化を図ることが人文科学研究所の課題である。



制度の流れ—沿革

現在の京都大学人文科学研究所は、1939年に設立された同名の研究所(旧人文)と、東方文化研究所及び西洋文化研究所が合体して、1949年1月に発足した研究機関であり、3研究所の業績を継承しつつ、世界文化に関する人文科学の総合研究を行なうことを、その目的としている。

東方文化研究所

統合された3研究所のなかで最も歴史が古い東方文化研究所は、1929年、中国文化を中心とした学術研究を目的として、外務省から助成金をうけ、東京と京都に設立された東方文化学院の京都研究所の後身である。発足当初は研究員4名、助手4名にすぎず、所屋も京都大学文学部陳列館の一隅を借用していたが、1930年11月、北白川小倉町50番地(現東小倉町47番地)に新所屋が完成した。現在も人文科学研究所附属の東アジア人文情報学研究中心として使用されている建物がそれである。この建物は、研究所評議員濱田耕作の創意をもとに、武田五一・東畑謙三両氏が設計したスパニッシュ・ロマネスク様式のもので、今日に至るまで世人の注目を集めている。1938年4月、東方文化学院が改組され、京都研究所は独立して東方文化研究所と改称された。この頃には、研究員、副研究員、助手、嘱託員など30名以上の所員が、経学・文学、宗教、天文・暦算、歴史、地理、考古の6研究室に所属する体制も整っていた。なお東方文化学院時代の所長は狩野直喜であり、東方文化研究所時代の所長は松本文三郎と羽田亨であった。

西洋文化研究所

一方、西洋文化研究所は、1934年に民間団体として設立された独逸文化研究所(吉田牛ノ宮町1番地)を、1946年に改組した研究機関で、数名の研究員を委嘱して、イギリス、アメリカ、ドイツ等の文化を研究することになっていた。しかし、3,000冊をこえる書籍を含む一切の設備が、占領軍に接収されたため、その活動を停止せざるを得ず、結局、土地所屋は接収解除とともに京都大学に寄付され、すでに発足していた現在の人文科学研究所の所属に帰した。

なお、この所屋は村野藤吾氏の設計にかかる特色ある建物であったが、維持管理をはじめとした種々の問題のため、1974年に残念ながらとりこわされた。

旧人文科学研究所

最後に旧人文科学研究所は、東亜に関する人文科学の総合研究を行なう目的で、京都大学の附属研究所として1939年に設立された。翌年より産業経済・社会および教育・文化交渉史などからなる研究体制が整い、京都大学の文・法・経済・

1939年

人文科学研究所(旧人文)

1929年

東方文化学院京都研究所

1938年

東方文化研究所

1934年

独逸文化研究所

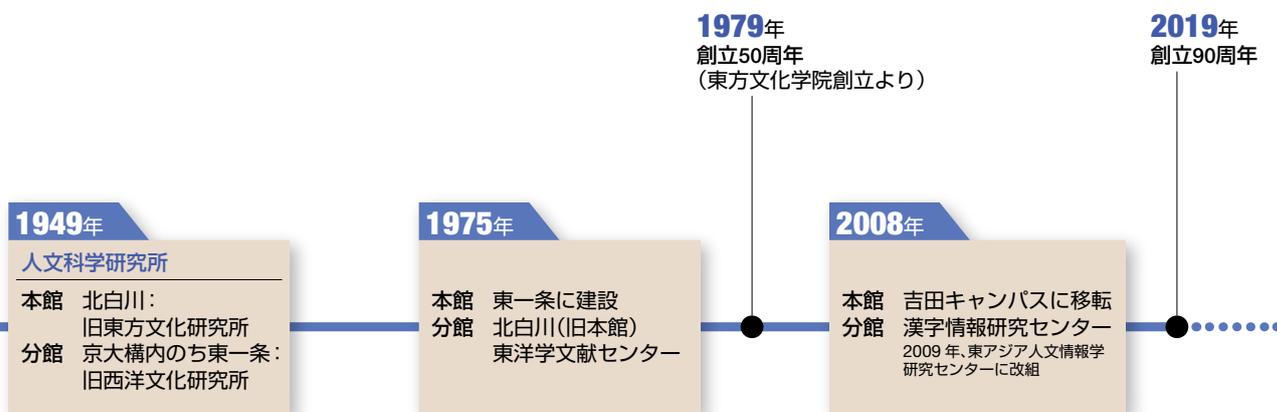
1946年

西洋文化研究所

農の各学部の支援をうけながら、教授1名、助教授5名、兼任所員13名で発足した。所屋には大学本部構内の中央図書館西北の木造2階建の建物(現在ではとりこわされてしまった)が充てられた。なお統合に至るまでの所長は、小島祐馬、高坂正顕、安部健夫であった。

3研究所の統合と人文科学研究所の発足

さて、旧人文科学研究所を中核として、東方文化研究所と西洋文化研究所を統合しようという動きは1946年末にはじまる。翌年に入り、西洋文化研究所を解散し、建物・設備を京都大学に寄付しようとする同研究所理事会の意向をうけ、当時の京都大学総長鳥養利三郎は、東方文化研究所長羽田亨らと協議して旧人文と東方文化、西洋文化を一つにした大研究所設立の実現に動きだした。1948年4月、まず東方文化研究所が外務省から文部省(京都大学)の所管にうつされ、ついで同年11月20日、3研究所を代表する3所員による公開講演を契機として事実上の統合が成立し、翌年、11部門、教授11名、助教授14名、助手19名からなる新しい人文科学研究所が正式に発足した。その後、社会人類学(1959年)、西洋思想(1964年)、日本文化(1969年)、現代中国(1975年)、比較文化(1978年)、宗教史(1980年)、比較社会(1981年)、日本学(1985年)、言語史(1988年)の各部門が増設された。なお、比較社会部門、日本学部門は、客員部門として外国人を招聘して運用されることになった。このほか1965年には



附属施設として東洋学文献センターが設けられた。1979年には東方文化学院が創立されてから満50周年を迎えたため、11月9日に創立50周年記念式典が催され、詳細な沿革を誌した『人文科学研究所50年』が出版された。

新たな研究体制へ

2000年4月、人文科学研究所はいっそうの発展をめざし、また時代の要請に応えるために、全面的な改組を行なった。この結果、従来の小部門の制度を改め、5部門、1附属研究施設からなる大部門制をとることになった。すなわち、京都大学内の先端科学や学外の芸術活動と連携しつつ、新たな文化研究の方法をさぐる「文化研究創成部門」、諸文化の生成、継続、消滅の動態を新たな視点から研究する「文化生成部門」、非言語的素材を通して中国文化のありようを考察する「文化表象部門」、漢字文献の解読を通して中国文化のありようを検討する「文化構成部門」、多文化間の人、物、情報の連関事象を人類史的にとらえなおす「文化連関部門」の5部門である。また、人文科学研究所の対外展開を漢字情報のデジタル化により支えるものとして、東洋学文献センターを拡充し、情報科学研究機能も加え、漢字情報研究センター(2009年に東アジア人文情報学研究センターに改組)に改編した。

いずれの部門でも、所員は個人研究のテーマを持つと同時に共同研究に参加する義務を負う。人文科学研究所の一つの特色をなす共同研究は、すでに東方文化研究所、旧人文科学

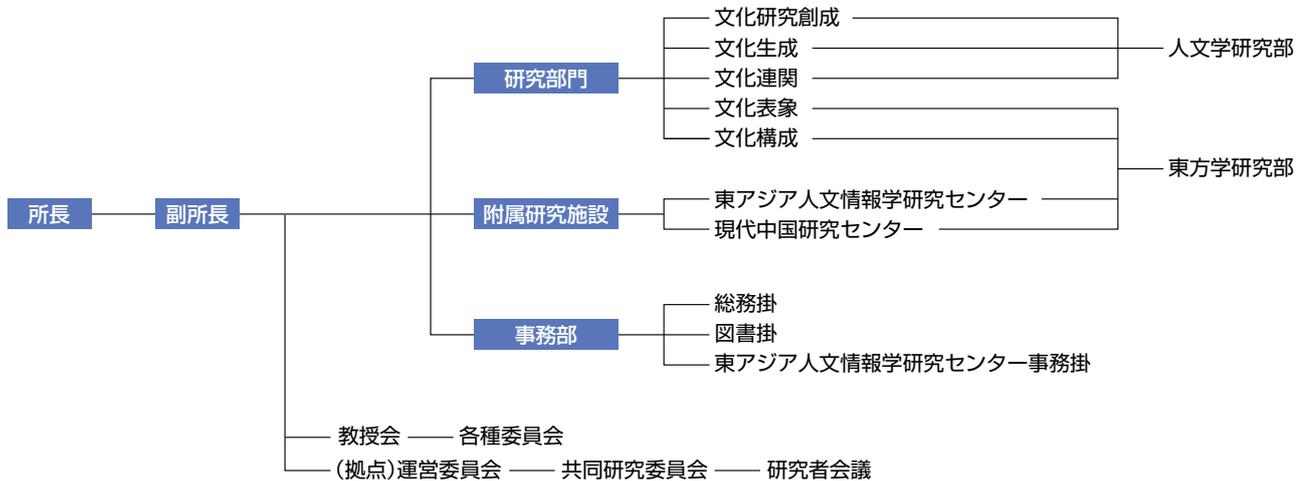
研究所時代からの歴史を持つが、特に統合・改組以後は部・部門相互間、あるいは学際的な共同研究を展開することによって、学問が過度に専門化する弊害を防ごうとしている。人文科学研究所はこれまで、古典学、歴史学、実地調査を柱に、緊密な人間関係のもと、国際性、持続性の高い共同研究を展開し、個人研究においても、既成の学がとりあげなかった実験的課題に挑戦してきた。その過程で深められた、人文科学的関心と東洋学的関心とは、学の範疇としては次元を異にするものの、相互に刺激を与えつつ共存し、人文科学研究所の創造力の源泉をなしてきた。この態勢を新機構でも活かすため、運営内規上の工夫として、旧日本部、西洋部を人文学研究部(文化研究創成、文化生成、文化連関の3研究部門)に、旧東方部を東方学研究部(文化表象、文化構成の2研究部門と漢字情報研究センター)に再編した。もちろん共同研究の多くは、両研究部にまたがって展開している。

2008年5月に人文科学研究所は吉田キャンパス内に移転し、附属研究施設として現代中国研究センターを設置し、所内措置として人文学国際研究センターの活動を開始した。2010年から、「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」の事業として、新たな研究領域・課題を開拓するため、公募による共同研究班の組織や、国際研究集会の開催支援などの取り組みを始めた。また、データベースの拡充や所蔵資料のオンライン提供などを進めるほか、2015年から「みやこの学術資源研究・活用プロジェクト」を開始するなど、共同利用の機能強化を図っている。



研究組織

2000年4月、人文科学研究所は1949年の設置以来半世紀以上にわたって続けてきた小部門制から大部門制に移行した。日本部、東洋部、西洋部の3部に分かれていた17小部門+1附属施設を、5大部門+1附属施設に再編し、研究運営の便宜上これを人文学研究部と東方学研究部の2部に分けた。その後、一つの附属研究センターを加え、現在に至っている。



文化研究創成部門

人間の文化を構成するのは、生物としてのヒトであり、そのヒトから成る家族や民族などの集団であり、会社や国家などの社会組織である。文化研究創成とは、そうした文化についての研究のあり方を、既存の研究分野やディシプリンにとらわれることなく、根底から見直したうえで、新たな研究視角の提示や研究方法の創出をめざすものである。

この課題を遂行するため、本部門では、従来から重視されてきた社会科学や自然科学との連携に留まらず、芸術学に媒介的な役割を与え、文理融合から文芸理融合へと分野横断的研究を拡大・深化させることを構想している。本部門が学際的に編成されているのは、こうした課題意識に基づく。

本部門は、他の研究部門の成果を統合する結節環としての機能も担っているが、さらに、研究成果を国内外に発信し社会に還元する課題にも、客員部門と協力しつつ、積極的に取り組んでいる。

文化生成部門

文化が生まれ、発展し、継承されていくメカニズムの解明なしには文化の本質や根源に迫ることはできないし、錯雑化した現代の文化状況を分析し、そこから将来への展望を切り拓くこともできない。

しかしながら、文化といってもそこには政治・経済からはじまって文学・思想・美術など多種多様な領域があり、それぞれの文化領域を捉えるための方法や視角は、決して一元的ではありえない。さらにまた文化が生まれ、変容し、伝承されていく、その様態は時代や地域において著しく異なっており、その時間と空間の違いに起因する多様性を究明することにこそ、文化研究の醍醐味があると同時に困難さも潜んでいる。

時代や地域そして分野によって異なる文化のあり方を、その固有性において把握するとともに、固有性を越えた普遍性のレベルをも探求し、文化の本質を明らかにするところに本部門の課題がある。

文化連関部門

文化はひとたび生まれると時代や空間を超えて移動し、相異なる文化との接触を繰り返しながら変貌を遂げる。人類の文明を形成してきたのはこうした異文化接触であった。

加速度的に亢進するグローバリゼーションの時代にあつて、経済や政治そして情報は世界的な同時性をもって動き、社会も連動性をもって推移している。しかし、同時性や連動性と並んで、地域的な文化や生活の固有性を保持しようとする力が作動していることも看過されるべきではない。また、文化の流動性と持続性がせめぎあう異文化交渉の過程が、時代に応じて大きく変容してきている以上、長いタイムスパンの中で実相を明らかにする努力は不可欠である。歴史的パースペクティブなしでは、眼前の趨勢さえ見誤ることになりかねない。

本部門では、文化生成部門の成果を踏まえ、異文化間接触で生じる事態の考察を通じて、グローバル化時代における学知のあり方を探求している。

文化表象部門

継続性と広域性を兼ね備えた東アジアの文化体系について、時間と空間の両面に関わる文化の実相を、文献研究と実地調査の二重証拠法により総合的に研究する。

人間の創造した文化は、そのエッセンスをなす部分が後世に伝えられるに際し、文学や思想などのように文字を介するもののほか、文字以外の形態によって受け伝えられる分野も相当の割合を占めている。しかも文字を介した文化伝承の場合に比べ、それ以外の媒体で伝承される文化については、その中に込められた思考や価値観を抽出することは容易ではなく、それぞれの分野ごとに独自の方法を用意する必要がある。

本部門では、主たる対象を中国を中心とする東アジア文化圏に定め、考古文物、出土文献、科学技術、図像芸術、礼制習俗など五つの分野に重点を置いて研究対象の歴史の変遷を記述するばかりでなく、形象化して表出された文化の諸要素が、東アジア文化圏のなかで如何なる地位を占め、如何なる機能をはたしてきたのか、また周辺の文化圏とどのように相互交渉を行ってきたのかについても探究する。

文化構成部門

本部門は、文化表象部門との協同のもとに、おもに中国を中心とする東アジア地域を対象として、その文化体系の全体像を解明する研究の一翼を担う。文化表象部門が非言語的な文化現象を手がかりに文化観念の側面にまで分析を進めるのとは対照的に、本部門ではまず言語を通じて表出される文化営為に着目して、言語史、宗教史、思想史、制度史、新学史など五つの分野から文化意識の形成を時系列的に追究するとともに、その文化意識の表出としての文化現象にまで考察の対象を広げることによって、意識から表象へというベクトルに沿いながら、文化体系の深層から表層にいたる成り立ちを構造と動態の両面から複合的に解明する。

さらに言語史、制度史の分野では、東アジア人文情報学研究センターと協力して全国漢籍データベース、人文科学研究所蔵拓本文字データベースなどの構築を進める。また、新学史分野は現代中国研究センターとともに、人文学とくに歴史学の視角から現代中国の深層構造を分析する。



研究者一覧

(職階ごとの50音順)

凡例

- ① 学位(取得大学)
- ② 専門分野
- ③ 個人研究のテーマ、もしくは最近の研究領域
- ④ 学内での講義科目。題目のあとに(研究科/学部名)

教授



あさはら たつろう

浅原 達郎

文化表象部門

- ① 文学修士(京都大学)
- ② 東洋史
- ③ 先秦時代の金文
- ④ 戦国竹書(文学研究科/文学部共通)



いなもと やすお

稲本 泰生

文化表象部門

- ① 文学修士(京都大学)
- ② 仏教美術史、東アジア美術史
- ③ 東アジア仏教美術史の研究
- ④ 東アジア仏教美術研究(文学研究科/文学部共通)



いけだ たくみ

池田 巧

文化構成部門

現代中国研究センター(兼任)

- ① 文学修士(東京大学)
- ② シナ・チベット語方言史
- ③ 川西走廊の漢藏諸語の記述研究
- ④ シナ=チベット諸語の類型特徴(文学研究科/文学部共通)、アジアの文字論(ILASセミナー)



いわい しげき

岩井 茂樹

文化構成部門

現代中国研究センター(兼任)

- ① 博士[文学](京都大学)
- ② 中国近世史、東アジア関係史
- ③ 13世紀-20世紀中国の財政史研究、中国近世の法制と裁判文書研究、東アジアの朝貢と互市の研究
- ④ 近世東アジアの交易と外交(文学研究科/文学部共通)



いしかわ よしひろ

石川 禎浩

文化表象部門

現代中国研究センター(兼任)

- ① 博士[文学](京都大学)
- ② 中国近現代史
- ③ 中国共産党史の研究
- ④ 中国共産党史に関する文献演習、東アジアの戦争と植民地をめぐる歴史認識(文学研究科/文学部共通)、日中間係史(全学共通科目)



いわき たくじ

岩城 卓二

文化生成部門

- ① 博士[文学](関西大学)
- ② 日本近世史
- ③ 日本近世社会解体過程の研究
- ④ 代官所役人の世界(文学研究科/文学部共通)



いなば みのる

稲葉 穰

文化構成部門

- ① 文学修士(京都大学)
- ② 中央アジア史、東西交渉史
- ③ イスラーム東漸史の研究
- ④ イスラーム期ペルシアにおける君主鑑について(文学部)、ペルシア・イスラーム文化と君主鑑(文学研究科)、インド洋世界論(アジア・アフリカ地域研究研究科)



ウィッテルン クリスティアン

WITTERN, Christian

東アジア人情報学研究センター

- ① 哲学博士(Ph.D.)(ゲッティンゲン大学)
- ② 人情報学、中国禪仏教
- ③ 仏教研究知識ベース—禪仏教を例として
- ④ 人情報学(人間・環境学研究科)



おかだ あけお
岡田 暁生
文化研究創成部門

- ① 博士[文学] (大阪大学)
- ② 西洋音楽史
- ③ 19・20世紀の西洋音楽史およびジャズ史
- ④ モーツァルトの現代性について(文学研究科/文学部共通)



たかぎ ひろし
高木 博志
文化生成部門

- ① 博士[文学] (北海道大学)
- ② 日本近代史
- ③ 近代天皇制の文化史的研究
- ④ 文化財と政治(文学研究科/文学部共通)



おかむら ひでのり
岡村 秀典
文化表象部門

- ① 博士[文学] (京都大学)
- ② 中国考古学
- ③ 古代中国の考古学的研究
- ④ 中国古代の考古学的研究(文学研究科/文学部共通)



たかしな えりか
高階 絵里加
文化研究創成部門

- ① 博士[文学] (東京大学)
- ② 日本近代美術史
- ③ 近代日本の美術と西洋
- ④ 美術と明治維新(全学共通科目)、日本の歴史と文化—近世・近代美術史(全学共通科目・留学生向け講義)



かごたに なおと
籠谷 直人
文化連関部門
現代中国研究センター(兼任)

- ① 博士[経済学] (大阪市立大学)
- ② 日本経済史
- ③ 戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク
- ④ グローバル・ヒストリー(アジア・アフリカ地域研究科)



たけざわ やすこ
竹沢 泰子
文化連関部門

- ① Ph.D. (ワシントン大学)
- ② 文化人類学、アメリカ研究
- ③ 人種・エスニシティ論、移民・マイノリティ研究
- ④ 人種・エスニシティ論(文学研究科)、人種・エスニシティ論(文学部)、偏見・差別・人権(全学共通科目)



こせき たかし
小関 隆
文化連関部門

- ① 博士[社会学] (一橋大学)
- ② イギリス・アイルランド近現代史
- ③ 第一次大戦期のアイルランド問題
- ④ イギリスの1960年代、サッチャー時代のイギリス(文学研究科/文学部共通)



たけだ ときまさ
武田 時昌
文化表象部門

- ① 文学修士(京都大学)
- ② 中国科学史、科学思想史
- ③ 中国伝統科学の思想史的考察
- ④ 中国の思想と科学(文学研究科/文学部共通)



さとう じゅんじ
佐藤 淳二
大学院地球環境学堂(両任)

- ① 博士[文学] (東京大学)
- ② ヨーロッパ近・現代思想史と文学理論
- ③ 技術・自然・(ポスト)現代性の思想—哲学的探求
- ④ 環境・技術存在論(地球環境学堂)



ふじい まさと
藤井 正人
文化研究創成部門

- ① Ph.D. (ヘルシンキ大学)
- ② インド学、サンスクリット文献学
- ③ ヴェーダ文献の生成と伝承の研究
- ④ 最初期ウパニシャッド研究、インド学・サンスクリット学の諸問題(論文指導)(文学研究科/文学部共通)、サンスクリット文献史(ヴェーダ文献)(文学部)



ふなやま とおる
船山 徹
文化構成部門

- ① 文学修士 (京都大学)
- ② 仏教学
- ③ インド・中国における仏教の学術と実践
- ④ 仏教語の解釈法 (文学研究科/文学部共通)



いとう じゅんじ
伊藤 順二
文化連関部門

- ① 博士[文学] (京都大学)
- ② コーカサス近代史
- ③ 露土戦争とグルジア社会
- ④ ロシア帝国とジョージア (グルジア) (文学研究科/文学部共通)、露書講読 (文学部)、ことばの歴史・言語学の歴史 (ILASセミナー)



みやけ きよし
宮宅 潔
文化構成部門

- ① 博士[文学] (京都大学)
- ② 中国古代史
- ③ 秦漢制度史の研究
- ④ 中国古代制度史と出土文字史料 (文学研究科/文学部共通)、東アジア文献論 (人間・環境学研究科)



ク ナ ウ ト ティ ル
KNAUDT, Till
文化連関部門

- ① Ph.D. (ハイデルベルク大学)
- ② 日本近現代史
- ③ 近現代日本の社会史・思想史・技術史
- ④ Japanese History (全学共通科目)



やぎ たけし
矢木 毅
文化表象部門

- ① 博士[文学] (京都大学)
- ② 東洋史 (朝鮮中世近世史)
- ③ 朝鮮前近代における政治史及び政治制度史の研究
- ④ 朝鮮史詳説 (文学研究科/文学部共通)、龍飛御天歌講読 (全学共通科目)



くらもと ひさのり
倉本 尚徳
文化構成部門

- ① 博士[文学] (東京大学)
- ② 中国思想文化史
- ③ 六朝隋唐仏教史の研究
- ④ なし



やすおか こういち
安岡 孝一
東アジア人文情報学研究センター

- ① 博士[工学] (京都大学)
- ② 人文情報学
- ③ 文字コード論
- ④ 人文情報学 (人間・環境学研究科)



こがち りゅういち
古勝 隆一
文化構成部門

- ① 博士[文学] (東京大学)
- ② 中国古典学
- ③ 中国注釈学史研究
- ④ 玄学文献講読 (文学研究科/文学部共通)

准教授



いし い み ほ
石井 美保
文化研究創成部門

- ① 博士[人間・環境学] (京都大学)
- ② 文化人類学、アフリカ・南アジア研究
- ③ 宗教・呪術・憑依に関する人類学的研究
- ④ 文化実践論 (総合人間学部)、文化人類学演習、文化・地域環境方法論 (人間・環境学研究科)



せ と ぐ ち あ き ひ さ
瀬戸口 明久
文化研究創成部門

- ① 博士[文学] (京都大学)
- ② 科学史
- ③ 生命科学と社会、人と動物の関係
- ④ 環境としての科学技術 (文学研究科/文学部共通)、科学技術を考える——人文学の視点から (ILASセミナー)

ついき こうすけ
立木 康介
文化生成部門

- ① 博士[精神分析](パリ第8大学)
- ② 精神分析
- ③ 精神分析的知の思想史的位置づけ
- ④ 臨床心理学講読演習(教育学研究科/教育学部共通)、心理臨床学講読演習(教育学研究科)、フランス学に触れる(ILASセミナー)



ながた ともゆき
永田 知之
東アジア人文情報学研究センター

- ① 博士[文学](京都大学)
- ② 中国古典文学
- ③ 中国中世近世の文学理論
- ④ 漢籍目録法・漢籍分類法(文学研究科/文学部共通)、中国中世・近世短編物語選読(全学共通科目)



なかにし たつや
中西 竜也
文化表象部門

- ① 博士[文学](京都大学)
- ② 東洋史
- ③ 中国イスラームの研究
- ④ 中国ムスリムのアラビア語文献の研究(文学研究科/文学部共通)、アジア・アフリカ・スーフィズム論(アジア・アフリカ地域研究研究科)



ひらおか りゅうじ
平岡 隆二
文化表象部門

- ① 博士[比較社会文化](九州大学)
- ② 科学史
- ③ 東アジア伝統科学の研究
- ④ なし



ふけ たかひろ
福家 崇洋
文化生成部門

- ① 博士[人間・環境学](京都大学)
- ② 日本近現代史
- ③ 近現代日本の社会運動・社会思想
- ④ 近現代日本社会運動史(文学研究科/文学部共通)、ファシズムについて(ILASセミナー)



ふじはら たつし
藤原 辰史
文化研究創成部門

- ① 博士[人間・環境学](京都大学)
- ② 農業史
- ③ 食の思想史、台所の歴史、農業技術の歴史
- ④ 食と農の現代史(文学研究科/文学部共通)、現代史概論——ナチズムを中心に(全学共通科目)、ファシズムについて(ILASセミナー)



ふるまつ たかし
古松 崇志
文化構成部門

- ① 博士[文学](京都大学)
- ② 東洋史
- ③ 10-13世紀ユーラシア東方における王朝間関係の研究
- ④ 前近代ユーラシア東方の石刻資料の研究(文学研究科/文学部共通)、日中関係史(全学共通科目)



むかい ゆうすけ
向井 佑介
文化表象部門

- ① 修士[文学](京都大学)
- ② 考古学
- ③ 歴史考古学的方法にもとづく中国文化研究
- ④ 中国初期仏教寺院の考古学的研究(文学研究科/文学部共通)



むらかみ えい
村上 衛
現代中国研究センター

- ① 博士[文学](東京大学)
- ② 東洋史、経済史
- ③ 近代中国の港市・開港場の取引制度・官商関係、移民制度、外国籍華人の研究
- ④ 仲介者のつくる歴史——伝統中国・近現代中国(文学研究科/文学部共通)、Modern East Asian History(文学研究科/文学部共通)、日中関係史(全学共通科目)



もりもと あつお
森本 淳生
文化生成部門

- ① 博士[フランス文学・文明](ブレーズ・バスカル＝クレルモン第2大学)
- ② フランス文学
- ③ フランス象徴主義と文学的モデルニテ
- ④ ポール・ヴァレリー「若きバルク」を読む、ジャック・ランシエール「文学の政治学」を読む(文学研究科/文学部共通)、フランス学に触れる(ILASセミナー)

助教



いけだ さなえ
文化生成部門

- ① 博士[文学](京都大学)
- ② 日本近代史
- ③ 近代日本における皇室財産形成過程の研究
- ④ 明治期の政治家文書の講読(文学部)、近代日本史講義(全学共通科目)



きくち あきら
文化連関部門

- ① 博士[文学](大阪大学)
- ② 日本民俗学
- ③ 近代日本における民俗誌的实践の総合的研究
- ④ 民俗学(全学共通科目)、民俗学ゼミ(ILASセミナー)



しらす ひろゆき
文化構成部門

- ① 博士[情報科学](北陸先端科学技術大学院大学)
- ② 人文情報学、論理学
- ③ 東方学における対象の論理学的研究
- ④ なし



たかい たかね
文化表象部門

- ① 修士[人間・環境学](京都大学)
- ② 中国家具史
- ③ 中国家具とその使用に関する研究
- ④ 中国の伝統的室内装飾(ILASセミナー)、漢書講読(文学部)



とくなが ゆう
文化連関部門

- ① 博士[歴史学](南カリフォルニア大学)
- ② 移民史、アメリカ研究
- ③ 在米日本人・メキシコ人移民、移民政策、人種・エスニシティ
- ④ 英書講読、在米アジア人移民史(文学部)、英語ライティング-リスニング(全学共通科目)



ふくたに あきら
福谷 彬
東アジア人文情報学研究センター

- ① 博士[文学](京都大学)
- ② 中国哲学史、儒教思想
- ③ 南宋期道学の経書解釈
- ④ 東アジア世界における朱子学と陽明学(全学共通科目)



ふじい としゆき
藤井 俊之
文化生成部門

- ① 博士[人間・環境学](京都大学)
- ② ドイツ文学・思想
- ③ 啓蒙と文学——アドルノ美学における「人間性」の位置づけ
- ④ ドイツ語講読 Illouz, Eva: Gefühle in Zeiten des Kapitalismus. を読む(文学部)



ふじい のりゆき
藤井 律之
文化構成部門

- ① 博士[文学](京都大学)
- ② 中国古代中世史
- ③ 中国古代中世の官制史
- ④ 『梁職貢図』の研究、群書治要の研究(人間・環境学研究科/総合人間学部共通)



みや のりこ
宮 紀子
文化構成部門

- ① 博士[文学](京都大学)
- ② 中国文学
- ③ モンゴル時代の政治と文化
- ④ 中国語講読(文学部)



もりおか ともひこ
守岡 知彦
東アジア人文情報学研究センター

- ① 博士[情報科学](北陸先端科学技術大学院大学)
- ② 多言語情報処理、人文情報学
- ③ 文字オントロジーに基づく文字処理、一般キャラクター論
- ④ なし



外国人研究者の招へい

人事委員会による厳正な審査を経て選考する招へい研究員(外国人客員)のほか、勤務の契約によらない招へい外国人学者と外国人共同研究者の枠を設けて、外国人研究者を受け入れている。

招へい研究員については、1981年と1985年にそれぞれ創設された比較社会部門(現在は文化生成部門)と日本学部門(現在は文化連関部門)が外国人客員部門に充てられ、近年は常時2人が通常3か月ないし6か月にわたって滞在している。外国人研究者の出身国籍は、過去10年で16か国に及ぶ。外国人研究

者は、共同研究班での報告、シンポジウムへの参加、セミナーの開催、紀要への研究成果の投稿など、さまざまなかたちで人文科学研究所の研究活動に貢献しており、その受け入れは、人文研が国際的な研究活動を展開するうえで、きわめて重要な制度となっている。

招へい研究員一覧(2010-19年度受入)

周 東平(廈門大学 教授)
●犯罪と刑罰に関する比較研究 ▶2010.1-2010.7

VERARDI, Giovanni
(イタリア国立アフリカ・東洋研究所 研究員)
●インドにおける仏教の危機と没落に関する研究 ▶2010.3-2010.9

METZLER, Mark(テキサス大学 准教授)
●近現代日本史、グローバル・ヒストリー(ヨーロッパ、中国、合衆国)、開発政治経済学 ▶2010.7-2011.1

LAVOCAT, Françoise(パリ第7大学 教授)
●16、17世紀のヨーロッパ文学におけるフィクション概念の研究 ▶2010.10-2010.12

PENNY, Benjamin(オーストラリア国立大学 副学部長)
●現代中国の宗教実践 ▶2011.1-2011.4

朱 岩石(中国社会科学院考古研究所 研究員)
●東アジア初期仏教寺院の研究 ▶2011.1-2011.7

SPECTOR, Céline(ボルドー第三大学 准教授)
●「正義感覚」概念の生成と用法 ▶2011.4-2011.7

HADOLT, Bernhard(ウィーン大学 Full-time Lecturer)
●臨床遺伝学の文化人類学的研究 ▶2011.7-2011.10

胡 令遠(復旦大学 教授)
●戦後における中日文化交流及びその中日関係への影響 ▶2011.7-2012.1

陳 松長(湖南大学岳麓書院 副院長)
●占術理論の中日比較研究 ▶2011.10-2012.1

VOGELSAANG, Kai(ハンブルグ大学 教授)
●尚書と刻本等の研究 ▶2012.1-2012.7

FANSELOW, Frank(ブルネイ・ダルサラーム大学 学科学長)
●アジアにおける民族紛争と表象との相互関係についての研究 ▶2012.5-2012.9

KRASSER, Helmut(オーストリア科学アカデミーアジア文化精神史研究所 所長)
●インド・チベット仏教思想史 ▶2012.8-2012.11

RAVINA, Mark(エモリー大学 教授)
●日本近世史・近代史 ▶2012.8-2013.1

BLUSSE, Leonard(ライデン大学 名誉教授)
●アジアの通商ネットワークと社会秩序 ▶2012.11-2013.5

陳 偉(武漢大学 教授)
●日中木簡学の比較研究 ▶2013.1-2013.7

MOORE, Oliver James(ライデン大学 講師)
●東アジアにおける礼制と芸術 ▶2013.5-2013.11

SCHMIDT, Jan(ルール大学ボーム 講師)
●日本と東アジアにおける第一次世界大戦の研究 ▶2013.7-2014.1

朱 玉麒(北京大学 教授)
●近代以来の日中交流における漢籍伝播の研究 ▶2013.12-2014.5

劉 恒武(寧波大学 教授)
●前近代の日中交流史 ▶2014.2-2014.8

徐 興慶(台湾大学 教授)
●近代日本の中の後期水戸学——思想史からのアプローチ ▶2014.6-2014.9

任 城樸(延世大学 副教授)
●第一次世界大戦後における帝国改造論の日・朝思想連鎖 ▶2014.6-2015.2

LACHAUD, François Gilbert(フランス極東学院 教授)
●変革期における宗教の政治的・社会的役割——比較研究の試み ▶2014.9-2014.12

金 秉駿(ソウル大学 教授)
●秦漢時代における「県」設置過程の復原 ▶2015.1-2015.7

徐 静波(復旦大学 教授)
●近代日本知識人の中国認識(1920-1945) ▶2015.4-2015.8

JENSEN, Casper Bruun(レスター大学 Honorary Fellow)
●自然を社会化する——環境問題に対するインフラストラクチャーの対応 ▶2015.7-2016.1

田 世民(淡江大学 助理教授)
●東アジアから考える日中文化思想交流 ▶2015.8-2016.2

安 相祐(慶熙大学校 韓医科大学 兼任教授)
●日本残存韓医学資料の研究 ▶2016.1-2016.4

董 嶺(南京大学 副教授)
●域外漢籍及び十六国・北朝思想史と学術史の研究 ▶2016.3-2016.6

余 欣(復旦大学 教授)
●中世美術学の形成と日本的展開 ▶2016.4-2016.7

JAMI, Catherine Florence
(フランス国立科学研究センター Research Director)
●梅文鼎の数学研究と和算への影響 ▶2016.6-2016.9

OTMAZGIN, Nissim(エルサレム・ヘブライ大学 准教授)
●地政学とソフトパワー——東南アジアにおける日本の文化政策の100年 ▶2016.7-2017.1

WAHLQUIST, Håkan(スウェーデン王立科学アカデミー スウェン・ヘディン財団 常務理事)
●スウェン・ヘディンと京都 ▶2016.9-2016.12

李 磊(華東師範大学 副教授)
●六朝時代の東アジア——中国王朝と日本・朝鮮との関係 ▶2016.12-2017.3

巫 仁恕(中央研究院近代史研究所 研究員)
●19世紀後半中国の地域的消費と社会変遷——同治期四川省巴県を中心に ▶2017.2-2017.4

ZWIGENBERG, Ran
(ペンシルベニア州立大学 Assistant Professor)
●精神医学と原爆 ▶2017.4-2017.8

ZHANG, Qiong(ウェイクフォレスト大学 准教授)
●明末清初の天文気象学 ▶2017.5-2017.8

PFERSMANN, Otto
(フランス国立社会科学高等研究院 主任研究員)
●法学的認識論の弱さが法律体系にもたらす影響の比較研究 ▶2017.8-2018.2

金 培懿(国立台湾師範大学 教授)
●近代日本における経学史研究の展開と中国への影響 ▶2017.9-2018.2

下 東波(南京大学 教授)
●唐宋詩日本古注本研究 ▶2018.2-2018.4

TEEUWEN, Gerardus Jacobus(オスロ大学 教授)
●祇園祭の近代と現代 ▶2018.2-2018.8

李 裕群(中国社会科学院考古研究所 主任研究員)
●北朝石窟寺院研究 ▶2018.5-2018.8

張 淨秋(首都医科大学 副教授)
●中医学と古典学の文理融合的研究 ▶2018.6-2018.8

SMALL, Stephen A.(カリフォルニア大学バークレー校 教授)
●人種と色のシンボリズムの日米英国際比較 ▶2018.8-2018.11

全 勇勲(韓国学中央研究院 副教授)
●日韓両国における西洋天文学受容の比較研究 ▶2018.8-2018.11

DUTHILLE, Rémy P.R.(ボルドー・モンテニユ大学 准教授)
●18世紀ブリテンにおける晩餐・飲酒・乾杯 ▶2018.12-2019.3

焦 建輝(龍門石窟研究院 副研究員)
●日本に所蔵する龍門石窟調査資料の研究 ▶2018.11-2019.2

WALKER, Gavin(マギル大学 准教授)
●ポスト68年日本の思想史的再検討 ▶2019.3-2019.5

楊 振紅(南開大学 教授)
●出土史料を用いた中国古代法制史の研究 ▶2019.3-2019.5

BRANCACCIO, Pia(ドレクセル大学 准教授)
●南アジア美術における仏教の記念碑的建造物の研究 ▶2019.6-2019.9

ORBACH, Danny
(エルサレム・ヘブライ大学 Senior Lecturer)
●1880年代朝鮮半島における大陸浪人の歴史研究 ▶2019.7-2019.9

HARRISON, Faye
(イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校 教授)
●人種・人種主義の可視性・不可視性をめぐる人類学的研究 ▶2019.9-2019.12

JUDGE, Joan(ヨーク大学 教授)
●清末民初期の啓蒙書(日用類書)とその読者 ▶2019.9-2020.3

FERENTE, Serena
(ロンドン大学キングズ・カレッジ 准教授)
●中世・ルネサンス期のイタリア・地中海史 ▶2020.1-2020.3

招へい外国人学者・外国人共同研究者受入実績(2010-19年度新規受入)

年度	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	合計
招へい外国人学者(人)	11	6	3	8	8	8	10	13	10	8	85
外国人共同研究者(人)	11	8	8	9	8	6	6	7	6	4	73





共同研究と共同利用



「転換期中国における社会経済制度」研究班（2019年）

共同研究の歩みと現状

東方学研究部の前身である東方文化学院京都研究所は、中国文化の真髄を理解するための純学問的研究をめざして設立された。昭和初期、日中関係の悪化をはじめ、周囲の状況がそれと逆行してゆくなかで、時流に流されぬ学問的遺産が蓄積されていったのは、先学所員たちのなみなみならぬ努力の賜物であった。

東方文化学院京都研究所ではまず、基礎的な文献資料の収集と整理、その校訂と索引作成などに着手し、それらを土台として重要文献の会読に取り組んだ。ここでいう会読とは複数の専門家による高い水準の共同研究にほかならず、精密な会読の結果はテキストの校訂と訳注に凝集するとともに、場合によって索引が作られる。その過程において論文や研究報告が生産されていく。現在の東方学研究部の共同研究班の多くは、こうした原典会読方式のうえにたち、自由討論を加えるスタイルをとっている。

共同研究の会読方式のほかに、東方学研究部の研究体制のもうひとつの特色として共同研究室がある。東方文化学院の初期においては、所員はあらかじめ認められた研究題目に従って、3年ごとに研究報告を提出し、所長、評議員（指導員）の審査をうけて公刊する個人研究が中心であった。しかし、経学文学、歴史、宗教、考古美術、天文暦算、地理の6研究室にお

いて、それぞれの分野での会読が定着してゆくと、その効率的な推進のためにも研究室の果たす役割が増大していった。こうして1938年の東方文化研究所改組以後は、個人研究の指導員制度をやめ、研究室単位の研究体制に比重がうつる。

現在でも各共同研究室には関係文献や工具書類が常備され、東方学研究部共同研究班のいわば根拠地となっている。会読を軸とした共同研究は正式には1935年から、経学文学と天文暦算の研究室ではじまった。前者の成果は『尚書正義定本』に、後者は『漢書律曆志の研究』として世に問われた。経学文学研究室ではほかに元代の戯曲である「元曲」の研究を進め、さらに戦後には長い歳月をかけて全12冊におよぶ『唐代研究のしおり』を刊行する一方、白居易、李商隠などいくつかの作品を会読してきた。のちに科学史と改称された天文暦算研究室の活動は戦後特に盛んで、『天工開物』の研究をはじめ、時代時代の重要文献を会読しつつ数冊の中国科学技術史の論文集をまとめた。近年では、新発現の出土資料を使った中国医学の研究が行なわれた。

歴史研究室では、殷代甲骨文字、難解な元代の法典・行政文書集『元典章』、膨大な量の清代の『雍正硃批諭旨』などの会読と研究が行なわれてきた。また旧現代中国部門の設置以来、五四運動から毛沢東時代まで研究の幅を広げている。歴史地理は『水経注』の研究のほか、居延漢簡、石刻資料、都市

研究などを手かけ、宗教では六朝から唐代に重点をおき、儒・仏・道教それぞれの専門知識を必要とする難解な諸文献を解読しつつ、『肇論研究』などをまとめてきた。考古美術が中国・ガンダーラ仏教寺院の調査とともに中国出土文物の先端的研究を行なっていることは広く知られるところであろう。

1949年の統合のあと、旧日本部と旧西洋部はそれぞれ1部1班のかたちで共同研究をスタートした。日本部では柏祐賢の「日本の近代化」班、西洋部では桑原武夫の「ルソー研究」班がそれである。この日本近代と18世紀フランスは、今日でも依然として両部の主要な研究対象としてとりあげられている。共同研究は、所員を中心に所外の専門研究者の協力を得て、3年のサイクルで成果をまとめてゆく方式のもので、つぎつぎと目ざましい業績が挙げられたこともあって、「人文科学研究所といえば共同研究」というイメージを人びとにうえつけた。専門の枠にとらわれず、自由な共同討議を通じて新しい問題をほりおこす方法は、人文科学の共同研究のあり方のひとつのモデルともなったのである。やがて旧日本部は、思想・文化に重点をおく通称「意識」班と、経済・社会をとりあげる「機構」班にわかれ、それぞれ明治維新、米騒動を研究して報告書をあらわした。いっぽう旧西洋部も、しだいに研究領域を広げ、社会人類学などの部門を増設して内容を多彩にしてゆく。

こうして1969年までに、両部とも思想、文化、社会の3部門をそろえ、旧日本部では江戸時代末期の文化や現代の家族問題、旧西洋部では中世社会史や20世紀の政治史などの共同研究班も組織されるようになった。1981年度から外国人客員部門として増設された比較社会部門および1985年度増設の日本学部門は、各国の研究者たちが人文研の共同研究に一定期間、しかも継続的に参加できる道をひらいた。

2000年に研究所の改組が行なわれ、3部制を2部制（人文科学研究部、東方学研究部）に改めた。それにともない、日本・東洋・西洋などの各地域を対象とする共同研究だけでなく、「第一次世界大戦」や「人種表象」など地域横断型の共同研究が増えていった。

共同利用・共同研究拠点

人文研は、2010年度より共同利用・共同研究拠点としての活動を開始した。研究課題・責任者を公募で選ぶ共同研究が組織され、従来型の共同研究でも参加者を公募することによって研究者コミュニティにより開かれた運営をする新たな体制が整えられた。これは、旧来の国立大学附置研究所・センターが、研究者コミュニティの協力参加を得つつ、開かれた研究体制を築くことをめざす施策の一環であった。

人文研は、人文学の広い領域を対象とする「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」として文科省に認定された。人文学の基礎的研究を踏まえつつ、世界的視野から複数文化の生成・変動・相互交渉等を研究し、地球社会の調和ある共存に資する学術的知見を提供することを目的として掲げている。

現在、人文研の共同研究は三つのカテゴリーに区分される研究班によって担われている。

- ①**課題公募班(A班)** 研究課題自体を公募し、所外の研究者が班長を務める（所内の研究者が副班長としてサポートする）。
- ②**班員公募班(B班)** 研究課題を所内で選考したうえで班員を公募し、所内の研究者が班長を務める。
- ③**基盤研究班(C班)** 研究課題や班員の公募は行なわないものの、広く所外の研究者の参加を得ている点ではA・B班と同様である。

研究課題の性質に応じて最も適切な形態の研究班を選択することが三つのカテゴリーを置く趣旨であり、また、C班にはA・B班の基礎を据えるとともに、やがてはA・B班へと発展することも期待されている。また2018年度からは一般のA班に加え、40歳未満の班長が統括する若手A班を新たに設置し、特に国際ミーティングの開催とその成果の公開を促している。これら三つのカテゴリーの有機的連関が、人文研の共同研究拠点としての大きな特徴となっている。

拠点の運営、公募研究プロジェクトや公募研究員の選定については、所外・学外委員を加えた運営委員会、共同研究委員会で審議のうえで決められる。いずれも原則として3年を期限とする研究を行ない、成果報告書の刊行や国際研究集会の開催などの形で研究成果を公表することになっている。

共同利用・共同研究拠点の発足以来、2019年度も継続中の課題を含め「共同研究A」としてこれまでに15の課題が選定され成果を挙げた。共同研究の成果報告書の刊行やオンラインでの公開などによって、国内外の研究者コミュニティに研究成果を還元する事業も予算化され、2010年度以降、刊行された成果報告書は72点を数える。また、拠点が支援する国際研究集会が活潑に開催されるようになった。2018年度からはさらに、所外の研究者が主催する国際研究集会の開催を公募によって選定する事業を開始した。こうして「共同研究の人文研」の伝統を活かしつつ、施設や所蔵資料、データベースを広く内外の研究者の利用に供することにより、多様な共同研究を推進するとともに、新たな研究領域、研究課題を開拓している。



課題公募班の10年

(共同研究A班)

人文科学研究所は、「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」として文部科学大臣の認可を受け、2010年度に全国共同利用・共同研究の拠点活動を開始した。拠点としての研究活動を展開するにあたっては、人文研の伝統的な研究手法を活かしつつ、人文学および関連分野の研究者による共同研究を進めることを基軸に、研究者コミュニティに施設や所蔵資料、データベースを公開して、広く内外の研究者の利用に供することにより、新たな研究領域、研究課題の開拓に取り組んできた。

拠点における共同研究班には、三つのカテゴリーが設定されている。課題および責任者(班長)を公募する「課題公募班(共同研究A班)」と、拠点が提案した課題について、共同研究員(班員)を広く学内外から募集する「班員公募班(B班)」、そして公募は行なわれないが、より専門性の高い所内外の班員で構成する「基礎研究班(C班)」である。拠点の運営と諸手続きについては、人文研内の研究計画委員会が企画立案し、公募研究プロジェクトや公募研究員の選定に関しては、所外・学外委員を加えた運営委員会および共同研究委員会による審議を経て決定される。

拠点発足以来10年が経過し、その間に公募による選考を経て採択された多彩な研究課題は、現在継続中のものも含めて15を数える。いずれもこれまでに蓄積されてきた人文学に関する多様な基礎研究の成果を踏まえつつ、世界的視野から複数文化の生成・変動・相互交渉等を研究する。これらの研究は、地球社会の調和ある共存に資する学術的知見を提供することを目的として展開する一連の研究活動の一環を担うものである。

ここではこの10年間に採択された「課題公募班(共同研究A班)」について、研究課題と概要、そして公開された研究成果などを紹介したい。いずれもすでに研究期間を終了した課題についての記録であり、現在継続中の「課題公募班(共同研究A班)」については、本誌20-21ページの「共同研究一覽」に概要を掲載している。



刊行された研究成果

情報処理技術は漢字文献から どのような情報を抽出できるか 人文情報学の基礎を築く

山崎直樹(関西大学 教授)

2010年7月-2012年3月

現代の情報処理技術を使って、東アジア古代社会の遺産として残された漢字文献から、どのような情報を抽出できるかという問題に対し、複数の角度からその可能性を探り、人文情報学の基礎を築くことを目標に、静止画像資料や動画資料など、非文字データへのメタデータ付与、文字と画像が混在し線的な展開をしない資料へのメタデータ付与の可能性を探った。また、機械が意味を読み取ることが可能となったデータを相互に関連づける大規模なLinked Open Dataの可能性などについて、公開シンポジウムに外部からの報告者を招き、その現状と問題点を討議し、将来への展望を見据えた理解を共有した。

【公開シンポジウムの記録】

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2011/01/ymzknk2011-02-18.pdf>

グローバル化する思想・宗教の 重層的接触と人文学の可能性

奥山直司(高野山大学 教授)

2010年7月-2012年3月

グローバル化が進行する現代社会における思想および宗教の流通と消費の問題を、「複数文化の重層的接触」という観点で捉え、現代のみならず過去150年程度のスパンでこれを分析し考察した。宗教と進化論を柱にすえ、その伝播の諸相を人文学諸分野にわたって検討した。宗教については仏教、キリスト教、イスラーム教などの各地への伝播過程や変容過程を「複数文化の接触」という視点から分析し、進化論については、そのアジア各地への伝播を「近代思想と伝統社会」の接触として位置付け、宗教や社会、文化への影響を考察した。

【公開シンポジウムの記録】

http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2013/07/globalizing_religion.pdf

生命知創成に向けた プラットフォームの構築

小林傳司(大阪大学 教授)

2010年7月-2012年3月

生物学研究は、1970年代を起点に、実験室における自然哲学的色彩を伴う研究から、人々の日常生活における生と死の領域全般に影響をもつ生命科学へと変容を遂げた。社会の視点を加味した新しい「生命知」として生命科学を把握しなおすことを目的に、科学者、社会学者、人類学者、哲学者、歴史学者などが共同で検討を行なった。生命科学の研究現場では、数学や物理学、工学など、これまでになかった分野との交流や共同研究が本格的に進行し、個別生命現象の理解が深まる一方で、「生命らしさ」の解明を含む、生命現象の本質に迫るには、いまだ研究者は試行錯誤していることも明らかになった。

【研究報告資料】

『ライフサイエンスの半世紀——歴史を振り返り、現在を考える』人文研アカデミー・特別セミナー記録集、2013年



「ヨーロッパ現代思想と政治」班：2015年1月12日、京都大学百周年時計台記念館で開催された国際シンポジウム。登壇者は、市田良彦（神戸大学教授）、エティエンヌ・バリバル（パリ西大学名誉教授）、ブルーノ・ボスティエール（コーネル大学教授）（いずれも当時）

ヨーロッパ現代思想と政治

市田良彦（神戸大学 教授） 2011年4月-2015年3月

構造主義・ポスト構造主義の名で呼ばれる一群の思想家が登場したフランスの1960年代は、「68年5月」に象徴される左翼運動の分岐と急進化の一時期でもあった。日本で「フランス現代思想」と呼ばれたこの思想潮流を、それが初発の時点でもった政治性に焦点を当てて再考するべく、全国から人文科学系諸分野の研究者20名余りを糾合し、欧米の研究者も交えて複数の公開学術集会を開催した。西川長夫・祐子夫妻から人文研が寄贈を受けた「68年5月」関連資料は、「バリ五月革命文庫」として図書室で閲覧に供している。

【刊行された研究成果】

市田良彦、王寺賢太編『現代思想と政治——資本主義・精神分析・哲学』平凡社、2016年 ISBN：978-4582703405

市田良彦、王寺賢太編『〈ポスト68年〉と私たち——「現代思想と政治」の現在』平凡社、2017年 ISBN：978-4582703559

環境インフラストラクチャー

自然、テクノロジー、環境変動に関する比較研究

森田敦郎（大阪大学 准教授） 2013年4月-2016年3月

温暖化等のグローバルな環境変動が進む今日、われわれの自然についての知識は、気候モデル、環境指標、情報アーカイブといった科学技術にますます依存しつつある。こうした技術と組織の体系を、近年の科学技術論における大規模技術システムや情報ネットワーク（インフラストラクチャー）についての議論をもとに、「環境インフラストラクチャー」として概念化することを試み、グローバルな環境変動と地域社会の関係について、科学技術の媒介的な役割を示す具体的事例から多角的に検討した。

【国際ワークショップの記録】

Environment, Infrastructure, and Life in the Anthropocene.

Workshop at Concordia University, Montreal, Oct. 19-20, 2015.

人文学研究資料にとってのWebの可能性を再探する

永崎研宣（人文学部学術研究所 主席研究員） 2013年4月-2016年3月

長期利用を前提とする人文学向けの文化資料に関わるデータやプログラムを、どのようにWeb上で持続可能なものとしていくのか。紙媒体においては読者に委ねられていた自由な解釈の余地は、デジタル化に際して効率的・効果的な機械可読性を求められるなかで、分類や符号化といった形で捨象されていく。しかし、そのルールが十分に記述されていないならば、データの解釈を誤らせ、さらにはデータそのものが失われることさえある。それを避けるには、持続性の高い記述形式でルールを適切に記述しておく必要がある。

【刊行された研究成果】

永崎研宣『日本の文化をデジタル世界に伝える』樹村房、2019年 ISBN: 978-4883673278

古典解釈の東アジア的展開

宗教文献を中心課題として

藤井 淳（駒澤大学 准教授） 2013年4月-2016年3月

中国を中心とする漢字文化圏の宗教文献と関連の諸事象に関する古典解釈の東アジア的展開の諸相を、他の諸地域における展開と対比して検討しながら、多様な専門家による総合的な研究を行なった。班員の顔ぶれは、インド学、仏教学、儒教、道教、イスラーム研究から美術史研究にまで及んだが、それぞれの領域の専門性に甘んじることなく、専門外の研究者にも理解可能な内容と表現を心がけて研究報告を行なった。さらに、それぞれの発表に対して、発表者とは異なる専門分野のコメンテーターが用意され、領域の垣根を超えた活潑な討論を展開した。

【研究成果報告】

藤井 淳編『古典解釈の東アジア的展開——宗教文献を中心として』京都大学人文科学研究所、2017年



「人文学研究資料にとってのWebの可能性を再探する」班



「ヨーロッパ現代思想と政治」班



「グローバル化する思想・宗教の重層的接触と人文学の可能性」班：公開シンポジウム

東アジア伝統医療文化の多角的考察

大形 徹 (大阪府立大学 教授)

2014年4月-2017年3月

東アジアの伝統医療文化を構造的に把握し、社会、思想や文化に発揮した作用を総合的に検討するために、医学史、科学史の専門家や臨床の現場で働く医師、鍼灸師、薬剤師に加えて中国哲学、道教、音韻学、簡牘学、古文書学などの諸領域の人文科学研究者に参加を呼びかけ、『医心方』などの古医書を会読しながら研究発表、特別講演を行なった。医学、本草学と思想、宗教、占術との境界領域に考察のメスを入れ、世俗に流行した長生法、養生術との関連性、年中行事や習俗、信仰への影響を多角的、複眼的に討議した。

【学会報告の記録】

2017年6月9-11日に第118回日本医学史学会&展示会を京都大学にて挙行し、併催イベントとして京都アスニーにて連続講義を行なった。
http://jsmh.umin.jp/congresses_past.html

日本宗教史像の再構築

大谷栄一 (佛教学 教授)

2014年4月-2017年3月

近現代の宗教史認識に歪みをもたらした「近代主義的なバイアス(たとえば、「宗教」と「オカルティズム」を過剰に峻別する宗教観など)」を克服し、宗派や時代やディシプリンによって分断された「日本宗教史」研究の各領域を連携させ、新たな日本宗教史像を構築することを目標に、宗教と非宗教、創唱宗教と自然宗教、近代と前近代などの二項対立を方法的に攪乱し、グローバルヒストリーの一環としての日本宗教史を重層的・立体的に描き出すこと、そのための方途を探索した。

【刊行された研究成果】

大谷栄一・菊地 暁・永岡 崇編『日本宗教史のキーワード——近代主義を超えて』慶應義塾大学出版会、2018年

ISBN: 978-4-7664-2535-2

「特集：日本宗教史像の再構築——トランスナショナルヒストリーを中心として」『人文学報』108号、2015年

*収録論文は京都大学学術情報リポジトリ「紅」からPDFファイルが利用できます。

<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/204496>



「日本宗教史像の再構築」班



「オーラル・ヒストリー・アーカイヴスによる戦後日本映画史の再構築」班：人文研アカデミー 2018・公開シンポジウム企画「映画『祇園祭』と京都」

オーラル・ヒストリー・アーカイヴスによる戦後日本映画史の再構築

谷川建司 (早稲田大学政治経済学術院 客員教授)

2016年4月-2019年3月

映画学におけるオーラル・ヒストリー構築において、裏方として映画製作を支えた現場スタッフ、興行の現場、ファン雑誌の編集者などの様々な人たちが、どのように映画に関わり日本の映画文化を形づくってきたのかが顧みられることはなかった。日本の映画最盛期における製作・配給・興行・観賞という映画産業総体に亘る特徴的の局面をその各現場において担った人々の証言に基づき映画史を再定義するうえでの基礎資料を集積すべく、3年間で計15名の映画人への共同インタビューを行ない、アーカイヴス化した。また、京都府が著作権をもつ時代劇映画『祇園祭』(1968年)の経緯について調査し、シンポジウムを開催した。

【研究報告資料】

人文研アカデミー 2018・公開シンポジウム企画「映画『祇園祭』と京都」報告書、2019年
「平成28年度～平成30年度 映画人インタビュー集」2019年

チベット・ヒマラヤ文明の史的展開の学際的研究

岩尾一史 (龍谷大学 准教授)

2015年4月-2018年3月

チベットは7世紀以降、中央アジアに覇を唱えて強大な帝国を築き、11-12世紀に仏教を受容して以降は、近代に至るまで周辺文化との交流を繰り返しつつモンゴルから東アジアにまでその文明圏を伸張させ、20世紀半ば以降もその影響力は欧米社会にまで及んでいる。本共同研究班では、チベット・ヒマラヤ地域から周辺諸文明との交流を通じて伝播したと考えられる社会システム、宗教、儀礼、言語などの発展の諸相に関する研究成果を学際的に集積して、チベット文明の史的展開を多角的に分析し、ユーラシア世界における位置づけの再評価を行なった。

【研究成果報告】

岩尾一史・池田 巧編『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』京都大学人文科学研究所共同研究報告、2018年

*収録論文は京都大学学術情報リポジトリ「紅」からPDFファイルが利用できます。

<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/235355>



「チベット・ヒマラヤ文明」研究班：信仰の生きるラサの薬王山摩崖石刻



共同研究一覽

2019年度共同研究班 (各グループごとの班名の50音順)

課題公募班 (A班)

- 「システム内存在としての世界」についてのアートを媒介とする文理融合的研究 ● 2019年4月-2022年3月 | 三輪眞弘
日本鍼灸医術の形成—近世医学史の再構築 ● 2018年4月-2021年3月 | 長野 仁
フーコー研究—人文科学の再批判と新展開 ● 2017年4月-2020年3月 | 小泉義之
「見えるもの」や「見えないもの」に関わる東アジアの文物や芸術についての学際的な研究 ● 2019年4月-2022年3月 | 外村 中

班員公募班 (B班)

- 近代京都と文化 ● 2019年4月-2022年3月 | 高木博志
生と創造の探究—環世界の人文学 ● 2017年4月-2020年3月 | 岩城卓二
チベット文明の継承と史的展開の諸相 ● 2018年4月-2021年3月 | 池田 巧
東西知識交流と自国化—汎アジア科学文化論 ● 2017年4月-2020年3月 | 武田時昌
暴力・宗教・性の語りをめぐる ● 2018年4月-2020年3月 | 菊地 暁

基盤研究班 (C班)

- アジアにおける人種主義の連鎖と転換 ● 2016年4月-2020年3月 | 竹沢泰子
「ヴァードゥーラ・シュラウタストラ」研究 ● 2015年4月-2020年3月 | 井狩彌介・藤井正人
漢籍リポジトリの基礎的研究 ● 2016年4月-2021年3月 | ウィッテルン クリスティアン
3世紀東アジアの研究 ● 2018年4月-2021年3月 | 森下章司
秦代出土文字史料の研究 ● 2016年4月-2021年3月 | 宮宅 潔
前近代内陸アジアとその隣接地域の社会と文化 ● 2019年4月-2022年3月 | 稲葉 穰
前近代ユーラシア東方における戦争と外交 ● 2018年4月-2021年3月 | 岩井茂樹・古松崇志
中国在家の教理と経典 ● 2016年4月-2020年3月 | 船山 徹
帝国日本の「財界」形成についての研究—1895年-1945年 ● 2018年4月-2021年3月 | 籠谷直人
転換期中国における社会経済制度 ● 2016年4月-2020年3月 | 村上 衛
東方文化学院京都研究所旧蔵漢籍の整理と研究 ● 2016年4月-2021年3月 | 矢木 毅
21世紀の人文学—Our Ageを問う ● 2018年4月-2021年3月 | 岡田暁生・小関 隆・佐藤淳二
20世紀中国史の資料的復元 ● 2019年4月-2022年3月 | 石川禎浩
東アジア古典文献コーパスの実証研究 ● 2016年4月-2020年3月 | 安岡孝一
ブラフマニズムとヒンドウイズム—南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性 ● 2016年4月-2020年3月 | 藤井正人
『文史通義』研究 ● 2015年4月-2020年3月 | 古勝隆一
北朝石窟寺院の研究 ● 2015年4月-2020年3月 | 岡村秀典
龍門北朝窟の造像と造像記 ● 2017年4月-2020年3月 | 稲本泰生

課題公募班 (若手A班)

- 四天王の展開に関する研究 ● 2019年4月-2020年3月 | 高橋早紀子
書簡的エクリチュール—ヴァレリー研究の新たな展開にむけて ● 2019年4月-2020年3月 | 鳥山定嗣
中国古代史像再構築のための基礎的研究 ● 2019年4月-2020年3月 | 土口史記
東北アジアの騎馬文化と馬匹生産の研究 ● 2019年4月-2020年3月 | 諫早直人
「長い19世紀」におけるインド・中国の社会経済史の比較 ● 2019年4月-2020年3月 | 小川道大

「システム内存在としての世界」についてのアートを媒介とする文理融合的研究

班長／情報科学芸術大学院大学 学長・教授 三輪眞弘

この研究班は作曲家である三輪眞弘を班長とし、文系研究者、理系研究者、メディアアーティスト、在野エンジニアらを班員として、文系と理系の知の乖離をアートを介することで接合し、得られた知見を最終的にアートの形で社会発信することをめざしている。人文学の新しい形式による共同研究の試みである。

21世紀を生きる私たちにとって、「システム」や「テクノロジー」が最もアクチュアルな社会問題であることに疑いはない。われわれ人類は人為的エネルギーに支えられた高度テクノロジーの只中で生きており、一見「自然」や「環境」や「心」と見えるものすら、システムなしに存立し得ない状況に至っている。制御不能とも思えるこのテクノロジー・システムについて、アカデミズムの壁を超えて知性を集結し根本から考えることが、この研究班の第一の目的である。

「人文学の危機」が叫ばれる今日であるが、人文学は決して自らの問題を自らの手で解決することはできまい。自然科学においても同様であろう。というのも内部の視点から内部を語ることはできない。すなわち視界のなかに視点は存在しないからである。文系・芸術系・理系のメンバーが集うこの研究班は、人文学の外から人文学を見る場を提供する。そしてまたインターネットなどメディア発信の専門家をメンバーに加えた本研究班は、ルネサンス以来の「publish」以外のツールによる学知アウトプットのモデルを示せるであろう。

なお、本研究班の重要なキーワードの一つである「システム」については、『三輪眞弘音楽藝術——全思考 一九九八—二〇一〇』（アルテスパブリッシング、2010年）を参照されたい。



三輪眞弘作曲「ひとのきえさり、藤井貞和の詞による序奏と朗読」日本初演の様子（2014年、愛知芸術文化センター）。人が消え去ってシステムだけが回転し続ける世界を問う

日本鍼灸医術の形成 近世医学史の再構築

班長／森ノ宮医療大学大学院 保健医療学研究科 教授 長野 仁

研究班のスタートは、盛大なイベントで始まった。茨木元行『針聞書』編纂450周年を記念して覆刻版を刊行するとともに、5月12日の午前中に地元の茨木市鍼灸師会と共催で茨木神社にて茨木元行顕彰会の発足式を挙行し、午後には国文学研究資料館エコヘルスプロジェクトとの合同研究会を開催した。さらに、翌日には、午前中に井上流鍼灸術の傳承者、南谷旺伯氏を招いた講習会を行い、午後は茨木市立生涯学習センターにて声優の神谷明氏、古箏演奏家の伍芳氏、古典落語家の桂福丸を特別ゲストとする覆刻版刊行記念公開イベントを共同研究会と連動する形で開催した。

『針聞書』（1568）は、鍼術の流儀書としては現存最古である。病因として「腹中の虫」を想定し、63図のイラストを描いて治療法を詳述する。著者の茨木元行は、摂津国上郡（現大阪府茨木市）の医師で「今新流」を創始した。鍼術の流派は、江戸期に様々に分岐し、現代へと受け継がれており、その源流の一つがそこにある。そこで、本研究班では茨木を「鍼の聖地」と位置づけ、『針聞書』に端を発する流儀書、伝授書を総合的に考察することにした。

実のところ、富士川游が蒐集した古医書コレクションにも関連資料が数多く含まれている。ところが、富士川の大著『日本医学史』には、まったく言及されない。近代日本において、鍼術、灸法は忌むべき前近代医療の代表格であり、医学の世界から「医療外行為」として放逐されたために、技術的伝統は日本医学の黒歴史として隠蔽されている。歪んだ歴史認識によって生じた伝統社会との断層は、現代医学だけではなく、廃絶の危機を乗り越えた現代鍼灸においても、大きな弊害をもたらしている。その現状を打破して、東と西を調和させた統合医療の道を歩むために、鍼灸医術の形成や傳承の具体的様相を探ることで日本医学史の再構築を図り、その一方で「日本鍼灸学」という新分野を開拓しようと目論んでいる。



公開イベント「ザ・ハラノムシ・ワールド——茨木元行『針聞書』編纂450周年完全覆刻版刊行記念」の会場風景（茨木市立生涯学習センター・きらめきホール）

フーコー研究 人文科学の再批判と新展開

班長／立命館大学大学院 先端総合学術研究科 教授 小泉義之

ミシェル・フーコー (1926-84) が人文科学 (人文学・人間科学) へ及ぼした影響は極めて大きく、その普及の契機がフーコーにあったことも忘れられるほどに「常識」化している用語も多い。例えば、学術用語としての *discours* は、フーコー以前は、デカルトの *Discours de la méthode* における「叙説」、議会や儀式における「演説」、文法における「話法」であったが、フーコー以後には、とにもかくにも「言説」となってきた。そのアカデミズム化の契機がフーコーにあったテーマも数多い。思いつくまま並べるなら、病院、施設、精神医学、医療人類学、公衆衛生、優生、人種、セクシュアリティ、刑罰、リスク、監視、福祉、心理諸科学、自由主義、ポリス、統治、啓蒙などである。いまや、こうした単語からフーコーの影を払拭することは不可能である。

現在、人文科学に何らかの行き詰まりがあり、新たな (ポスト) 人文科学の方向が探られているとするなら、フーコーの世紀が終わりかけていると言うこともできるだろう。いまでは学部生も「言説」を普通に使っているが、そのことは、当時の日常言語分析や論理的言語分析に対抗して言説分析を押し立てたフーコーの役割はその歴史的使命を終えたということも意味するはずである。しかも、振り返れば、フーコー自身がその言説分析を棄てたようにも見える。とするなら、いまや、フーコーにおいて遺産化すべきものと記念物化すべきものを見分けながら、新たな人文科学を作るべきであろう。

2017年には、『コレージュ・ド・フランス講義録』全13巻が完結し、「プレイヤード叢書」でフーコー著作集全2巻が刊行され、フランス国立図書館が購入した草稿・資料の公開も始まっている。本研究班は、1年目の2018年度は『講義録』研究に重点を置き、フーコーの仕事の通時的な見直しを進めながら、現在の視点でフーコーを活用している国内外の研究者を招いて公開研究会も重ねてきた。そして、この2019年度、これまでの人文研のフランス研究の伝統と実績を引き継ぐと言いうような成果を発信するために、具体的な準備作業に入っているところである。



人文科学領域で20世紀に最も引用された著者とされるフーコー。その思想の影響は、いまも衰えをみせない

「見えるもの」や「見えないもの」 に関わる東アジアの文物や芸術 についての学際的な研究

班長／ドイツ・ヴュルツブルク大学 上級講師 外村 中

本研究班は、中国を中心とする東アジアの文物や芸術を解釈する上での共通の基盤の形成をめざして、理論と作品の両面から「見えるもの」や「見えないもの」について学際的な検討をおこなっている。作品を制作するにあたり、もっともやっかいな作業の一つは、あるいは「見えるもの」なのかもしれないが、普通であればまずは「見えない(と思われる)もの」を如何に表現するかである(あった)であろう。この点に関する議論において、インドから伝わった仏身の理論や中国固有の道の思想は大いに参考になりそうである。そこで、研究の基点をこの二つに置く。そして、眼をもって見るとか、心をもって見るとか、夢の中で見るとか、聴覚や嗅覚の器官をもって見るとか、様々な見方があることに十分に注意を払いながら、二つの基点から理論と作品が如何に関わり合い(あるいは関わり合わずに)展開してきたのかなどについて広い視野をもって考究する。

たとえば、仏身の理論に関しては、インドにおいて(共通暦)後2世紀頃以降盛んに議論されるようになったらしく、『般若経』、『法華経』、『華嚴経』、『大乘涅槃経』などにその大きな展開が認められる。一方、道の思想に関しては、中国においてすでに前2世紀頃までに『老子』、『莊子』、『淮南子』などが早くに独自の主張をおこなっている。そして、それらの内容を詳しく分析してみると、ブツダと道とに極めて近い特徴すら見いだせそうである。また、儒教が説く太極や性理との関係なども気になるところである。

以上のような問題意識をもって、考古、美術史、仏教、道教、儒教、古典、哲学、思想、芸術史、文化史、芸能史、音楽史、工芸史、庭園史、建築史、生活空間史など様々な分野の研究者が一堂に会し、理論と作品との間に認められる矛盾点にも目をとめながら、具体的な事例(特定の芸術作品など)を選定し、その文化史上における位置づけをおこない、実際に即した解釈のモデルをしめそうと努力しているのが本研究班である。



涅槃図(敦煌第428窟 中国・北周時代)。たとえば、いわゆる涅槃図に対して、理論的には真のブツダは「見えない」と解釈することも可能であることを如何に考えるかが目下の問題の一つである

近代京都と文化

班長 高木博志

今日、京都には、年間5,500万人以上の観光客が訪れる。世界でもっとも人気のある観光都市である。時代潮流は、文化財は保護より「活用」を、街の景観よりインバウンド観光や開発優先である。

たとえば祇園町南側は、「もてなし」の文化の典型として過剰な外国人観光客をよび弊害も生じている。しかし四条通南側の花見小路は、明治期には祇園の外れ、周縁であった。都をどりの本拠である祇園甲部歌舞練場の場所には、かつて定期的に娼妓が梅毒検査をおこない、罹患時には隔離される駆黴院があった。祇園甲部のお茶屋建築が美しい景観を生み、井上流京舞が「伝統芸能」として定着するのは、大正期以降である。また、嵯峨が今日の京都観光の女性性を体現する古典文学の妓王・妓女・横笛とともに女性的な名所に転換してゆくのも、平等院鳳凰堂が「国風文化」というピュアな日本文化の象徴となり、宇治が平家物語の戦乱の場から源氏物語の雅な場へとイメージを転換するのも、20世紀の国民国家形成とナショナリズムに深く関わっている。

「日本文化を創り出してきた京都」、雅な貴族文化などとバラ色に表象され、それらは文化庁移転のうたい文句にもなる。しかしすでに述べてきたように、こうした京都イメージは、近現代を通じて、政治的、社会的に創り出された側面が強い。本研究では、近代の京都と文化を、対象としつつ相対化する。歴史や文化には、つねに光と影がともなうものであり、複眼的にみる必要があるであろう。近代京都の文化について、民衆の生活・花街の性・差別の問題といった周縁性も視野に入れ、文化をめぐる政治や地域社会とのかかわりから捉えなおしたい。そのために、政治・教育・社会運動・経済・社会・宗教・思想や美術・映画・文学・建築・造園など多様な分野を専攻する歴史研究者が、自分の専門から一歩踏み出して、近代京都の「文化」を広くとらえ直して考えている。これまでに起こった、「近代京都研究」(2003-05年)、「近代古都研究」(2006-10年)、「近代天皇制と社会」(2011-16年)の共同研究を踏まえ、地域をめぐる学際的で批判的な共同研究会を展開している。



観光客で賑わう花見小路

生と創造の探究 環世界の人文学

班長 岩城卓二

本研究班の課題は、生きものとその周囲の世界との相互作用と不断の変転に着眼しつつ、生命の持続と創造的な変容の過程を探究することを通して、従来の人文学からの脱皮をめざすことである。

本研究班の基底をなす問いは、人間を含む「生きもの」にとって「生きる」とはどのような営みであるのか、というものである。ドイツの生物学者ヤーコプ・フォン・ユクスキュルは、生きものとの営みと、その営みがなされる世界との相互関係を「環世界(Umwelt)」と呼んだ。この言葉が自然科学ばかりでなく、人文学においても多大なる影響を及ぼしてきたことは周知のところである。ヴァイツゼッカーの『ゲシュタルトクライス』やその紹介者でもある木村敏の一連の仕事はもちろん、歴史学における環境史の活性化にも、人間と非人間の関係性を主題とする人類学的理論の深化や、近年の哲学等における「動物論」の隆盛にも、そのことは容易にみてとられる。人間と人間以外の「生」の営みを同じパースペクティブで論じることを、先行者たちは試みてきたのである。

本研究班では、こうした先行研究を引き継ぎながらも、「環世界」を単なる抽象概念として扱うのではなく、生きもの相互の「あいだ」や「空気」、さらにはそれらの関係のなかで生まれる技術や言説、生業のありかたなど、具体的な事象に寄り添いながら考えることを主眼に据えている。具体的な事例の検討と学際的な議論を通して、本研究班は、無文字の知も含めて生きものとしての人間が培ってきた「生き抜くための知」を多角的に探究している。

近年の人間と自然をめぐるさまざまな齟齬や葛藤は、従来の自然科学や人文・社会科学では捉えきれないダイナミズムを有している。それは、総合的な知の営みであったはずの人文学それ自体の限界を示しているともいえる。人間を、人間そのものとしてだけでなく、その境界や「界面」から捉え直すことが、かえってより深く人間を理解することにつながるのではないか。本研究の根底にあるのはそのような問いかけである。

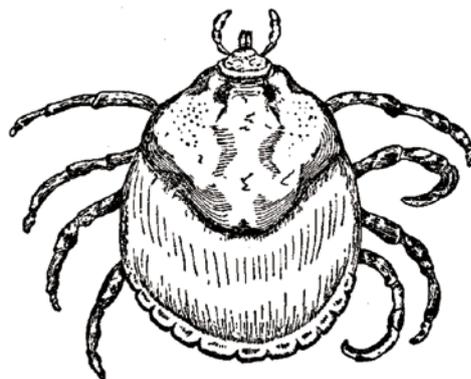


Abb. 1. Zecke

ダニの環世界(ユクスキュル『生物から見た世界』)

チベット文明の継承と 史的展開の諸相

班長 池田 巧

7世紀頃までにヒマラヤ地域に形成され始めたチベット文明は、11-12世紀に仏教を完全に消化して以降、周辺諸地域との歴史的交流を通じて独自の文明圏を築きあげるとともに、高度に発達した宗教・儀礼・言語・社会制度などを周辺地域に広く浸透させ、その影響力はモンゴルから東アジアにまで伸張した。20世紀半ば以降に国家としての枠組みが失われた後も、その発信力は衰えることなく欧米社会にまで及んでいる。本共同研究班では、チベット文明は如何にしてこのような発信力と柔軟性を獲得したのか、また周辺諸文明とどのように相克・調和してきたのか、チベット文明の継承と交流の諸相に関する研究成果を集積して、その史的展開を多角的に分析し、ユーラシア世界における位置づけの再評価を行なう。

現地調査の道が開け、資料の出版が相次いだことにより、チベットに関する一次データは着実に集積され、国際的にみても研究は格段に進展している。しかし同時に研究の深化とともに細分化も加速し、総体としてのチベット文明の特質は、あたかも自明のように置かれたままである。その主たる原因は、従来のチベット・ヒマラヤ地域の研究が、仏教学、歴史学、言語学、人類学など各分野の枠組みのなかでなされてきたことによる。近年は分野横断型の研究が主流になりつつあるけれども、いっぽうで日本のチベット学の諸分野の優れた蓄積と成果が、国際的には十分に認知継承されていないという現状もある。

こうした動向を受けて本研究班がめざすのは、学際的協力体制の構築であり、将来における当該分野の発展の礎を作ることである。細分化されつつあるチベット研究を再統合させ、チベット文明とは何かを総体的に記述することを目標に、最新の研究成果に基づく知見を手際よく整理するとともに、日本のチベット学が、何をどこまで明らかにしてきたのかを丁寧に論述した書籍を編集して出版したい。この書籍は、日本のチベット学の基礎を継承し、新たな展開の可能性を示す概論として、現在までの研究成果を広く一般向けに公開することを目的とするものである。



ダライ・ラマ政権の居城であったポタラ宮。1994年には「ラサのポタラ宮の歴史的遺跡群」がユネスコの世界文化遺産に登録された(2016年夏撮影)

東西知識交流と自国化 汎アジア科学文化論

班長 武田時昌

東アジアの自然探究の場合、異郷からもたらされる典籍、文物や文化的情報は常に刺激的であり、時には大きなブレイクスルーを誘発した。中国において、インド、イスラム、ヨーロッパなどの西方世界からもたらされた科学知識や技術は、理論的変革をもたらすほどに大きな作用を発揮した。そして、中国的受容を経た科学技術は、韓国、日本やベトナムに伝播し、それぞれ異なる自国化の道を促した。東アジア世界に開花した伝統科学文化について、近代科学の系譜づけという発展史観から離れて構造的に把握するためには、そのような東西知識交流に着眼し、宇宙論、自然観、生命観の形成と展開の具体的様相を探る必要がある。

会談のテキストには、『宿曜経』を取り上げている。真福寺、高野山などに残存する古鈔本は空海ら中国に渡った仏僧の将来本を書写したものであるが、大蔵経に収録された大隆刊本より古い姿を留める。そこで、密教占星術のルーツとしてその読解を試み、インド流の天文知識や占星術が中国でどのように訳出され、宿曜道として日本にいかなる波紋を及ぼしたのかを多角的に考察している。

もう一つの主要な考究対象に、須弥山説の近世的展開がある。18世紀後半に本木良永、志筑忠雄がニュートン物理学を訳出してコペルニクスの地動説が本格的に導入される。19世紀に入って、円通とその弟子達は、それらの蘭学書や方以智、梅文鼎の科学啓蒙書を読破し、須弥山説が正しいとする立場で西洋、中国で唱えられた種々の宇宙論を論駁した。そして、仏教擁護の梵曆運動を大々的に繰り広げる。

仏教天文学の立場から東西の天文暦学の衝突や折衷または古代への回帰を多面的に検討すると、これまで素描されてこなかった汎アジア的な風景が広がる。そのような視座から、東アジア伝統科学文化の特質と可能性、限界性を探りたいと考えている。



円通が源直泰に製作させた須弥山儀(1824年)。駿府城にあったものが静岡市葵区の宝台院を経て1875年に清水区小島町の龍津寺に移された

暴力・宗教・性の語りをめぐる

班長 菊地 暁

本研究班の目的は、語り注目しながら現代世界における暴力、宗教、性(ジェンダー/セクシュアリティ)を、包括的に考察することにある。その際、キーワードになるのがインターセクショナルリティ(交差性、intersectionality)である。これは、社会的な弱者に関わる様々な抑圧的・差別的力の交差に注目した概念であり、日本語では「複合差別」に近いと言える。その具体的な力として、ここでは暴力、宗教、性を考察対象とする。

ここでいう暴力は、国家間の軍事活動から、集団による他集団への暴力、そして個人間の対立、性暴力まで様々なものを含む。具体的には、主として文化人類学者を中心に、語りについての一次資料に基づいて考察を行う。さらに、暴力や宗教、性が引き起こす問題との関係で、医療、司法、アートなどの領域をも研究対象とする。

本研究は、人文科学研究所共同研究「トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究」(田中雅一代表、2010-14年度)の成果(『トラウマ研究1 トラウマを生きる』と『トラウマ研究2 トラウマを共有する』京都大学学術出版会2018-19)を継承発展したものである。

暴力と性との関係については、科学研究費基盤(B)「地中海から西・南アジア地域の人々に関わる〈名譽に基づく暴力〉の文化人類学的研究」(田中雅一代表、2013-15年度)と科学研究費基盤(A)「〈ジェンダーに基づく暴力複合〉の文化人類学的研究」(田中雅一代表、2016-19年度)と連携している。また、宗教については、科学研究費挑戦的研究(開拓)「もの、語り、アート、宗教にみるトラウマ体験の共有と継承」(田中雅一代表、2019-22年度)と連携している。これによって、共同研究と調査との緊密化を図り、今後のメガプロジェクトの可能性を探る。



インドのサティ(寡婦殉死) 夫の遺体を燃やす炎に身を投じ死を決意する寡婦とそれを祝福する女神

アジアにおける人種主義の連鎖と転換

班長 竹沢泰子

従来の人種研究のパラダイムでは、「人種は近代ヨーロッパが構築したもの」とする見方が定説となっており、奴隷制や先住民支配に象徴されるように、「征服」、「植民地主義」、「労働力の搾取」といった紋切り型の言葉で人種主義のストーリーが語られる。しかしそれは、長距離移動に伴う異集団間の接触により人種化が生じた環大西洋地域(ヨーロッパ、アフリカ、南北アメリカ大陸等)における経験を基に構築されたものにすぎない。こうした欧米中心のパラダイムからの脱却をめざす本共同研究は、日本・アジアの事例を積極的に取り入れ、欧米や他地域の事例と接合させることにより、人種主義や人種化について、より根源的なメカニズムを解明することをめざしている。

アジアにおける人種主義を考える際、同一地域内において人種化され、したがって身体的差異は不可視ながら、「血」や「出自」が異なるという言説により差別されてきた集団の存在が先鋭化される。日本の場合、被差別部落や在日韓国・朝鮮人がその例となる。日本のみならず他の多くの地域においても「小文字のrace」(竹沢、2005)は前近代から存在する。他方、近代に入ってから、欧米から連鎖し波及した学知、とくに科学言説は、これらの集団の「差異」を自然化することに多大な影響をもたらした。しかし、単に受容したのではない。時代的・地域的文脈に応じて、独自の転換を遂げたのである。例えば、明治期の教科書にみられる「人種」記述は、明治初期から中期にかけて変容し、当初の皮膚の色などの可視的な身体形質から、日本人にも達成可能とされる「文明」へと意味転換をなした。また、ヨーロッパではチェザレ・ロンブローゾの生来性犯罪者説とベネディクト・モレルの変質論の間に論争が生じたが、日本では、その折衷的解釈が部落改善政策に適用された。

本研究は、人間がどのように人を分類し、名指し、差別を生み出すのかという基礎的人文学の大きな問いに迫るものである。それは、現実の人種差別や、ジェンダー差別等のメカニズムの解明にもつながると考えている。



フランス国立社会科学高等研究院 TEPSIS と共催の国際シンポジウム

「ヴァードゥーラ・シュラウターストラ」研究

班長 井狩彌介・藤井正人

本研究の中心は、井狩が南インド・ケララ州で入手したヴェーダ文献関係伝承写本群のうち、ヤジュル・ヴェーダ所属の祭式古学派ヴァードゥーラ派の主要祭式文献「ヴァードゥーラ・シュラウターストラ」の研究である。従来、同派文献は欠陥の多い二次写本のみを用いて研究が試みられてきたが、本写本群の発見によりほぼその全容が知られ、研究は新しい段階に入っている。学界から要請されてきた同派主要文献の全体の公刊に向けて準備が進められている。

本研究においては、ヴェーダ・シュラウタ祭式体系の中核となる重要祭式を、ヴァードゥーラ派の伝承に焦点をあてて文献学的検討を行うことが課題である。具体的には、ヴェーダ中期に展開した社会と文化の改革再編を象徴する大規模な祭式である「アグニチャヤナ祭」の研究を進めている。この祭式は、ヴェーダの最古文獻リグ・ヴェーダ以来、ヴェーダ祭式の中核に置かれた「ソーマ祭」（ソーマと呼ばれる菓草を供儀に用いる祭式の総称）の枠組みを用いながら、壮大な5層の煉瓦火壇の構築に象徴されるように、神格でもある祭火アグニそのものを焦点に据えた複合祭式として成立したものである。アグニチャヤナ祭を扱う「ヴァードゥーラ・シュラウターストラ」第8章を研究対象にして、井狩が準備する校訂テキストと訳注に対して、研究会において班員全員で検討を行う方式で研究を進めている。最終的研究成果としては、「ヴァードゥーラ・シュラウターストラ」第8章の批判刊本と詳細な訳注の刊行を予定している。

この共同研究は、井狩が人文科学研究所客員教授として組織したものである。最先端のヴェーダ・シュラウタ祭式研究の方法と知見を、共同研究を通して次世代に伝えることも目的の一つとしている。研究会には、ヴェーダを中心にさまざまな分野の中堅・若手の研究者と大学院生が全国から参加している。当初、客員教授の任期(3年)を研究期間としていたが、任期終了後、研究期間を延長して、井狩が引き続き研究を主導しながら、藤井が班運営を行う形で研究を継続している。



「ヴァードゥーラ・シュラウターストラ」の新発見写本（撮影・井狩彌介）

漢籍リポジトリの基礎的研究

班長 ウィッテルン クリスティアン

漢籍は漢字文化圏において不可欠な伝達媒体である。ここでの漢籍は主に中国において木版で印刷された書物を指す。1980年代後半から漢籍の電子テキスト化の動きが始まった。現在研究者の共通認識は、「利用の為に信頼性のあることは電子テキストの最低条件だ。しかし自由に使えることがより望ましい」というものである。

現行の共同研究班の前身である「人文情報学の基礎研究」(2013年-16年)では、「漢籍リポジトリ」の名前で漢籍デジタル・テキストの総合的なリポジトリを作成・公開した。ここでは編集文献学的手法に基づき、各々の漢籍について、テキストのデジタル翻刻と元のバージョンのデジタル・ファクシミリ画像とを並べて閲覧することを可能にし、複数のバージョンを収録した。さらには、編集権限所有者が独自の校勘によってテキストを更新することも可能にした。収録漢籍は、現時点で9,000点以上にのぼり、2016年3月の初公開以来、広く利用されている。

本共同研究班では、この漢籍リポジトリによって、新たな知見を獲得しようとしている。第一歩としては、所謂ディスタント・リーディングの手法を使って、例えば『論語』の中の文章はどんなテキストに引用されているか、加えて『論語』の何処の部分が後のテキストに影響を与えたかを検討する。

欧米諸言語で書かれた文献は、早くから大規模なデジタル・アーカイブが作られ、分析方法の研究開発も盛んに行われてきたが、その成果はいずれも漢籍リポジトリの白文漢文の分析には適用できない。その分析には独自の方法を考案しなければならない。最近は言語に依存しない方法、すなわち文章を意味論的な要素に分解せず、確率論的な分解で決定論的な結果を得る方法を試みて、漢籍リポジトリの分類(伝統的な四部分類に「道部」と「仏部」を加えた六部)の各カテゴリーに収録されているテキスト間距離を算出し、従来の目録との違いを検討してみた。研究成果にはまだ直接に繋がらないかも知れないが、漢籍への理解を深めるための助けになるだろう。



漢籍リポジトリの部類を語彙の関係上の中心性(位置)と関連性(大きさ)で示したネットワークグラフの一部

3世紀東アジアの研究

班長 森下章司

東アジアの3世紀は、中国における後漢王朝の滅亡をきっかけとして、韓や倭をはじめ各地の地域勢力が勃興し、地域社会が独立性を強めた変動の時代であった。「魏・呉・蜀の三国が分立し、邪馬台国の女王卑弥呼が魏に遣使して銅鏡百枚や印綬を賜与された時代」といえば、より馴染みが深いかもしれない。日本列島において前方後円墳が出現し、弥生時代から古墳時代へと移行した時期でもある。

同じころ、北方の草原地帯では匈奴にかわって鮮卑が優勢となり、その東方では高句麗が勢力を拡大し、半島南部には馬韓・弁韓・辰韓が興起していた。そうした状況をものがたる資料として『三国志』をはじめとする文献があるほか、近年は中国や韓国の各地において発掘資料の増加がめざましく、考古学の研究成果も次第に蓄積されてきた。それにより、テキストに記された文化・習俗を、同時代の物質資料とつきあわせて検討することが可能となった。

この研究班では、ユーラシア草原地帯から中国・朝鮮・日本などの地域を主要な対象とし、考古学・文献史・思想史など多様な分野の研究者が集まってそれぞれの研究成果を報告し、3世紀における地域社会の特色や相互関係について、多角的な視点から検討をおこなっている。

これまでに、『三国志』魏書・烏丸鮮卑東夷伝のテキストの大部分を読解し、考古資料と対比させつつ検討してきた。また、それと併行して「異民族」、「天下観」、「墓制」、「飲食」、「生業」、「住居」などのテーマごとに関連資料の集成と分析を進めている。それにより、3世紀の東アジアの文化・思想を多面的かつ具体的に把握し、より鮮明な歴史像を描写することをめざしている。



鄴城三台遺址の基壇。3世紀初めに魏の曹操が建造した金虎台・銅雀台・冰井台の遺跡であり、高さ十丈と伝えられる巨大な基壇が現在も残っている

秦代出土文字史料の研究

班長 宮宅 潔

2002年、中国湖南省龍山県里耶鎮で秦代の都城遺跡が発掘され、そこにあった井戸の遺構から、4万枚近くの木簡が発見された。里耶鎮は、湖南省・湖北省・重慶市の境界が接するあたりに位置し、そのことからわかるとおり、山また山に囲まれた険しい山岳地帯のただ中にある、少数民族(土家族)の集落である。秦の始皇帝が中国を統一すると、かくも山深い田舎にまで秦の支配が及び、この地に「遷陵県」という名の県が置かれ、秦の役人が送り込まれた。出土した木簡(里耶秦簡)とはすなわち、これらの官吏が作成した文書や帳簿の類である。

里耶秦簡によれば、遷陵県の官吏定員は100人を超え、さらに合計1,000人ほどの兵士と労役刑徒がここに駐屯し、統治を支えていた。とはいえ、県が把握していた世帯は全体で200戸くらいで、一世帯の規模が平均して5人程度だったとすれば、総人口はせいぜい1,000人ほどと推測される。確かに県が設置されたものの、その支配に服したのは、この地域に暮らす人々の一部分に過ぎなかったのだろう。これが秦による「統一」の実情であった。山間の小集落にまで相当数の官吏を送り込む徹底ぶりには改めて驚かされるが、さりとてそれにより「中央集権」が実現したなどと考えるのは、やはり早計である。

ただし、最末端の官署とはいえ、遷陵県もあくまで秦帝国の行政機構の一部だから、中国古代における統治の仕組みを知るうえで、里耶秦簡はこのうえもなく重要な史料である。本研究班では里耶秦簡とともに、2003年に湖南大学岳麓書院が香港において購入した盗掘簡(岳麓書院所蔵簡)を会読しているが、この中には統一秦の法律条文が含まれる。こちらはいわば、秦における統治制度の設計図に当たるだろう。果たして設計図どおりに遷陵県での統治は行われていたのか、設計図自体に欠陥はなかったのか、細部に目をこらしつつ古代帝国の理念と現実とに迫るのが、本研究班のめざすところである。



里耶秦簡の出土した井戸の遺構(目黒杏子氏撮影)

前近代内陸アジアとその隣接地域の社会と文化

班長 稲葉 穂

いわゆる古代文明発祥の地である西アジア、南アジア、東アジアは、伝統的に、独自の歴史文化を形成してきたと考えられている。これらの文化世界は、地理的には海上と内陸アジア陸上ルートを通じて様々な形で接触してきた。その接触の場を提供し、時にこれら大陸縁辺に位置する文化世界に多大な影響をおよぼした内陸アジアもまた、20世紀半ば以降は、それらの地域と同等の一つの文化世界、歴史世界を形成してきたのだと考えられるようになったが、その一方で、同地に貼り付けられるイメージは、未だに「砂漠とステップにオアシス都市が点在し、遊牧部族が支配的な空間である」という、19世紀以来のオリエンタリズム的認識に毛が生えたようなものであった。

しかし、20世紀末のソヴィエト連邦崩壊を機にパミール高原以西の内陸アジアが世界の研究者に対して門戸を開き、また東トルキスタンにおいて中国による活発な研究調査が進んだことにより、当該地域を研究するための材料や視点は急速に増大してきている。この20年ほどを見ても、東トルキスタン北・西部や、ウズベキスタン、タジキスタン、トルクメニスタンで「発見」された重要資料は枚挙のいとまがないほどである。

このような新しい研究状況を踏まえ、今後進められねばならないのは、上述のようにステレオタイプ的に理解されてきた内陸アジア内部の地理的・文化的な多様性や、社会結合のあり方、都市空間に関するより詳細な研究と、ユーラシア大陸規模で展開された広域的文化現象の精密な把握であろう。本研究班では、内陸アジアとその隣接地域、および内陸アジアとユーラシア大陸縁辺部を隔てる（東はチベット高原から西はコーカサス山脈に到る）大山脈群に関する社会研究、文化研究のケーススタディを積み重ねることで、可能な限り多様な内陸アジア像を描き出すことをめざしている。



『回教必道』（作者不詳・民国時代）。小児錦（漢語音をアラビア文字で表記したもの）のテキスト

前近代ユーラシア東方における戦争と外交

班長 岩井茂樹・古松崇志

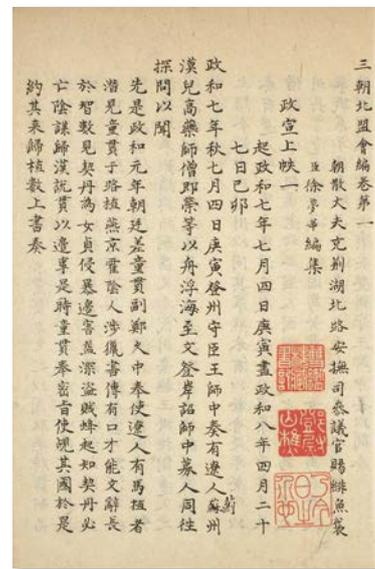
ユーラシア大陸東部では、北方の遊牧・狩猟民の集団がしばしば強大な遊牧王朝を形成し、農耕に基盤を置く南の中国王朝と対峙し、ときに中国本土を征服することもあった。この両者の間の対立・共存・支配被支配・融合といった多様な関係性が、ユーラシア東方史の基調をかたちづけてきた。

本研究班では、こうしたユーラシア東方史の特質を実証的に検討すべく、具体的な材料として、12世紀前半に北東アジアより興った金（女真）が、契丹と北宋をあいっいで滅ぼしてユーラシア東方に覇を唱えた時代にかかわる、南宋・徐夢莘撰『三朝北盟会編』を取りあげて会読をおこなっている。この書は、主に宋（北宋・南宋）・金間の戦争や外交交渉について詳しく記した宋側の各種記録を集成した編年体史書である。徐夢莘が集めた材料は、詔勅・外交文書・上奏文といった文書類から野史・伝記・碑志・筆記・文集などに至るまでおよそ200種に及び、もとの材料にほとんど手を加えずに採録しているうえに、文体も雅文漢文から白話まで多彩で、きわめて史料価値の高い文献であるが、正確に釈読するのはなかなか難しい。

いっぽうで、この文献は長く鈔本で伝来し、信頼に足る校訂本がまだまだ存在しない。そのため、諸版本や関連史料をつきあわせてテキストを校訂する作業が必須となる。幸い、人文研には清末民国期の文献学者として名高い傅增湘旧蔵の鈔本が所蔵されていることにくわえ、最近になって中国所蔵の明鈔本が影印出版されてアクセスが容易になったことで、従来の通行本（清末木版本・活字本）の誤りを正し、よりオリジナルに近いテキストを復原することが可能になってきた。

本研究班では、明鈔本を底本に文献を校訂・釈読し、関連史料と比較しながら史実を検討していくという、骨の折れる作業を進めている。文献史料に沈潜し、徹底的に深く読み込むとい

う文献史学研究の基本に立ち返ることこそが、いま重要なのではないかと考えて、班員諸氏とともに取り組んでいるところである。



人文研所蔵『三朝北盟会編』鈔本。傅增湘ら旧蔵者の蔵書印が捺されている

中国在家の教理と經典

班長 船山 徹

4-7世紀頃の中国(劉宋・南齊・梁・陳・隋・唐)で仏教は様々な発展を遂げた。出家僧だけでなく、皇族や貴族等の在家信者が果たした役割も大きかった。

出家者が学んだ經典や論書は現在の大藏經の全貌から知ることが可能であるけれども、「在家者の仏教知識は一体どの程度であったか」、「出家者の理解と相違する点はあったのか、なかったのか」、「在家者に共通の得手不得手があったか」等の問いに答えることは難しく、仏教史研究の長い蓄積にもかかわらず、現在に至るまで確かな答えは得られていない。

班長として私は、在家信徒が素材として用いた仏書を知りたい。例えば6世紀後半の陳から隋にかかる時代、經典では後秦の鳩摩羅什訳『法華經』、『維摩經』と北涼の曇無讖訳『大般涅槃經』が、仏伝としては呉の支謙訳『太子瑞應本起經』が頻繁に用いられた。しかし出家教団の生活規則である『律』については、それを読むことを禁じられていた在家信者がどれ程まで知っていたか、どのような形で知っていたかは大きな問題のまま残っている。在家は出家専用の『律』を自ら読んでいたのか、『律』に関してどの程度の知識をもっていたか、『律』と関わる知識を在家者が有していたなら、それは自ら直接に読んだ結果か、梁の宝唱撰『經律異相』のような百科全書的の仏典(類書)から得た知識なのか。

人文研ではかつて『肇論』、『弘明集』等の会読が行われた。本研究班はその流れを継承しながら、多くの在家仏教徒の著作を収める道宣『広弘明集』(7世紀)を主に会読し、中国在家の実態解明をめざす。

他の研究班からの相違は二つ。第一に、本研究班は、対象文献の現代語訳と語注をめざすという点で読書を主としない研究班とは異なる。第二に、本研究班は、ごく近年に利用可能となった高麗大藏經初雕本や金藏広勝寺本などの最早期木版大藏經を駆使して用いて原文を策定する点で従来の会読班と異なる。

従来から行われていた、読んで訳注を付けるだけの面白くない作業こそが最も基本的にして最も重要な研究の実質であることを確信しながら研究班を進めている。



大正新脩大藏經總目錄(大藏出版、2007)

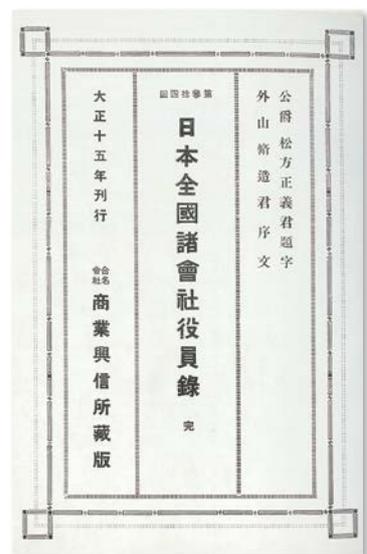
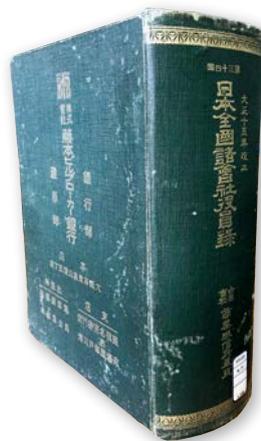
帝国日本の「財界」形成についての研究 1895年-1945年

班長 籠谷直人

19世紀後半の日本において、政治形態は徳川幕府から明治政府へと移行する。そして、経済的本質としては資本主義とそれを支える政権が登場する。あわせて国民を統合する「主権国家」が、1889年の明治憲法体制によってつくられた。こうした近代日本の形成と拡張にたいして列強先進国は強く警戒する。実際に日本は、日清戦争(1894-95年)と日露戦争(1904-05年)によって台湾と朝鮮を統合し、「帝国日本」へと変質する。この共同研究では、「帝国」の経済的基盤となる「財界」の求心的性格を議論したい。

明治政府の形成は、近世日本の「薩摩」と「長州」の連合体によって主導された。長州では伊藤博文、山県有朋などが代表的である。西郷隆盛や大久保利通を失った薩摩にあっては、松方正義などの活動が目される。なかでも経済政策においては、松方正義の施策の貢献が大きい。財政難という問題をかかえた新政府において、松方の多様な政策は、三井や三菱といった「財閥」の成長をうながし、日本に「財界」をつくりあげる経済的背景となる。

この共同研究の目的は、「政界」概念とならんで表現されるようになる「財界」をとりあげて、その実態を定義し、あわせて「財界」と「政界」との均衡的關係を解明することにある。権力の支援をうけて誕生する「財界」には政府とのパーティカルな關係がみられるが、地域ごとには資産家のネットワークの伸張という水平な關係も有していた。この共同研究では、『日本全国諸会社役員録』、『商工資産信用録』によってマクロの視点から財界を定義する。さらにミクロの視点としては、実業家の残した『当用日記』などの第一次史料を使いたい。



第三十四回日本全国諸会社役員録(大正十五年刊)(人文研図書館所蔵)

転換期中国における 社会経済制度

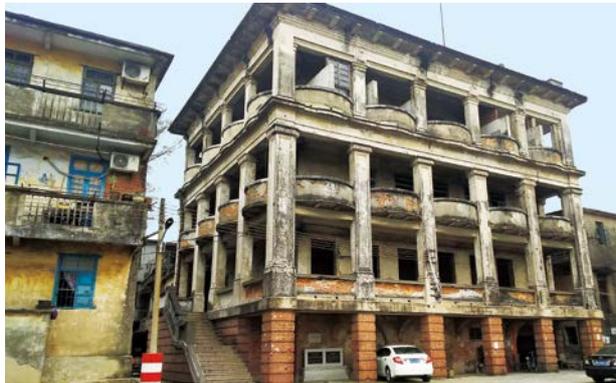
班長 村上 衛

海外を訪れば、日本と異なる常識にとまどうことは多いだろう。海外に少し長く住めば、現地のさまざまな慣習や規範に従う必要も出てくる。また、日本を訪れている外国人観光客の行動パターンに驚くことも少なくない。本研究班はこうした常識・慣習・規範・行動パターンといったものをまとめて「制度」と考える。そして、中国の社会・経済を規定してきた「制度」が転換期（1980年代以降、清末民国期、明末清初期）において、どのように維持され、あるいは変容してきたのかを検討する。

近30年の中国経済の拡大と人的交流の増大にともない、中国固有の「制度」が顕在化し、摩擦も増えてきている。これは中国の社会経済「制度」が欧米や日本とは大きく異なっており、欧米人や日本人がそれを理解できていないことが原因である。様々なレベルで生じている中国（人）と外国（人）の間の摩擦を解決するとともに、欧米や日本とは異なる中国の特徴ある経済発展を理解するためにも、「制度」を理解することが重要になっている。

本研究班では転換期における衝撃のなかから立ち上がってくる社会経済「制度」を様々なレベルで検討し、その研究成果を広く発信することを目指す。その際には2012-16年に組織した「近現代中国における社会経済制度の再編」班において積み上げられた個別実証研究をふまえつつ、より抽象的なモデルの抽出の段階へと進むことを考えている

かかる目的をもつため、本研究班の専門も人文科学と社会科学にまたがり、扱う時代も明清時代から現在まで幅広い。本研究班のメンバーは、100名を超え、報告内容も極めて多様である。そこで、報告者と専門ができるだけ近い方を、全国からコメンテーターとしてお招きすることで対応している。シニアの教員から若い院生まで世代的にも幅広い班員の報告や討論に基づき、今後も共同研究を進めていく予定である。



広東省三水にあるかつての海関（税関）のビル。1909年の建造。欧米人の税務司が主導する海関はまさに西洋の「制度」を代表し、中国の「制度」との間で様々な摩擦を引き起こした。この建物の現状は、西洋と中国の「制度」の綱引きの結果を象徴している

東方文化学院京都研究所 旧蔵漢籍の整理と研究

班長 矢木 毅

中国元朝の故事を多く記載する『草木子』（明・葉子奇撰）という随筆集を、清末の詩人である王尚辰（謙齋）という人は、少なくとも二回通読した。一度目は甲午年（1894）。二度目は癸卯年（1903）。人文研には彼の書入れ本が収蔵されており、そこにその旨が明記されているからである。

この書入れ本について特に目を引くのは、元の順帝の時代の権臣である秦王伯顔の記事に関する次の書入れであろう。

「近來、洋務日ごとに新たにして、朝政は日ごとに壞る。利を言うの臣は、富強に借りて名と為し、廉恥はうしない尽くす。其の伯顔を去るや幾ど希なり。光緒甲午四月、謙齋志す。」

これは秦王伯顔の専権によって、元朝の末期に売官が横行したという記事に添えられた書入れであるが、彼に言わせると、いわゆる洋務運動（西洋の軍事技術を導入した富国強兵の政策）に奔走する清末の官僚たちも、元朝の伯顔と大して変わりはないというのである。

王尚辰の批判が決定的外れではなかったことは、奇しくもその年に勃発した日清戦争によって明らかとなる。二度目の通読を行なった際、彼は自らの書入れを読み直して一体どのような感慨を抱いたであろうか。

国内各地の図書館に収蔵される「漢籍」の多くが江戸時代以来の「和刻本」であるのに対し、人文研の漢籍は同時代の中国の古書店・新刊書店から直接に買い付けた「唐本」が多い。そのなかには旧蔵者である中国の人々の蔵書印や書入れを伴ったものも少なくないが、われわれ「漢籍を見る会」では、そうした資料の一点一点について、いわば「漢籍のタイムカプセル」を開きながら、地道に序文や跋文を読んで内容をまとめ、「典拠情報」を作成している。

その成果については「全国漢籍データベース」にリンクされた「典拠情報」のページ、及び「リポジットリ紅」を通して公開されている「京大人文研蔵書印譜」などを参照していただきたい。



王尚辰の書入れ（草木子）

21世紀の人文学

Our Age を問う

班長 岡田暁生・小関 隆・佐藤淳二

あらゆる領域において今日の世界を覆っている息苦しさとはい体なんなのだろう。

それはいつ始まったのか、その正体は何か、一体どうなる(どうすればいい)のか。

ある意味で大変に素朴なこの疑問から出発し、それを「Humanitiesの危機」という相のもとに問う。これがこの研究班の課題である。

同時代についての社会科学的調査とは一線を画するものとして、この研究班は人文学固有のアプローチをめざす。すなわち「この時代はいつ始まっていたのか」についての歴史的研究が、一つの中心となる。その際の焦点は1970年代である。それは科学中心の未来史観の席捲、新自由主義経済学の台頭、左翼イデオロギーの退潮と前衛芸術の挫折、エネルギー問題と環境問題など、21世紀に流れ込む多くの潮流が用意されていた時代であった。

文化産業が相変わらず感動物語を大量生産する一方で、ポストモダンが喧伝されるようになる1970年代以後、社会への異議申し立てより身近なコミュニケーションへの傾斜が際立つようになる。「癒し」や「コミュニケーション」の流行は、「大きな物語の啓示」からの離反を示唆するものである。それは近代がめざした「世界を統一的に語る主体」の危機であり、極力「語る主体」を消すことを通し辛うじて、人文学の場合は「学的客観性」を、芸術創作の場合は「社会的有用性」を、それぞれ担保しようとしてきたのがこの半世紀弱であるとすら言える。

新自由主義的な成果主義の蔓延に伴う「近視眼症候群」は、例えば歴史学における研究対象とする時代の短縮化や大きな議論の禁欲的回避などを惹起した。「語ること」を敬遠する時代を経て、人文学はどこへ行くべきか。本研究班はこうした根本的な問いに少しでも答えることができる人文学をめざしている。



水俣病を初めとする公害は、近代の間観に大きな変更を迫った。これは現在の不知火海の景色

20世紀中国史の資料的復元

班長 石川禎浩

中国における近現代史の叙述は、長らく革命政党(例えば国民党、共産党)によって方向付けられてきた。それら政党がいずれも自己中心的、あるいは独善的なイデオロギーや歴史観を持ち、それを支えるために、歴史資料の収集やその編纂、刊行を重視してきたことは、周知のとおりである。ただし、その資料がかれらの歴史観や時々の情勢の求めに応じて改変され、また資料集として刊行されるさいに、都合良く取捨選択されるということも、しばしば起こった。

例えば、革命史である。革命活動の資料はその結社なり、政党なりが独占的に所有していることが多い。当然にかれらが行なった革命運動についての文献は、その党の専有物であり、それを研究する者は、かれらが編んだ資料集を使うことを余儀なくされる。原文書の自由な閲覧は、おおむね期待できないからである。たが、そうした資料集には編者の意図が混じり込む。この字句は指導者の権威を損なうことになるから削除しよう、この文献は重要で収録すべき資料だ、あるいは今は公開するのに不適当な資料だ……。資料集とは、結局はこうした判断を経て生み出されるのである。ことは思想史にせよ、あるいは文学史にせよ、さして変わらない。

つまり、既存の公刊資料や資料集を使う者は、それだけである特定の価値観や枠組みを共有するよう、仕向けられてしまうのだ。その仕組みに無自覚な場合、研究者は知らないうちに、その枠組に縛られてしまうことになるし、あるいは自覚していても、その枠組みから容易に脱却できないという苦境に置かれてしまうことになる。

それゆえ、近現代の中国がどのようなものであったのかを知るためには、極端な話、まず基本的な資料を一つ一つ編纂状態以前にもどすという気の遠くなる作業から始めなければならないということになる。本研究班は、20世紀の中国の政治、社会、思想、文化といった領域で、それぞれ根本資料と見なされてきた文献に関して、その生成や編纂、刊行の経過を洗い直したうえで本来の姿にもどし、それによって中国20世紀史全般を復元することをめざす。



『毛沢東選集』第2版の出版を報ずる「人民日报」(1991年7月1日)。選集編纂にさいし、毛沢東は自身で収録する文章を選び、修正・改変を加えた

東アジア古典文献 コーパスの実証研究

班長 安岡孝一

コンピュータによる言語処理という観点から見ると、古典中国語(漢文)の白文というのは、かなり厄介なシロモノである。単語と単語の間に区切りがない。文と文の間にも区切りがない。漢字がズラズラと切れ目なく並ぶだけ。こんなもの、どうやって読めばいいのか。

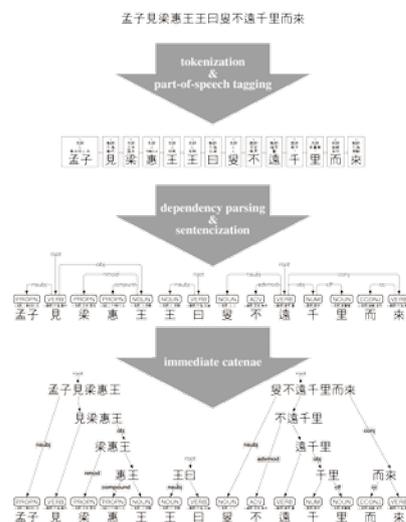
本研究班では、古典中国語における文法解析の自動化に取り組んでいる。漢文の白文に対し、形態素解析、依存文法解析、直接構成鎖解析を順におこなうことで、白文の統語構造が解析可能となるというのが、われわれの見通しである。

古典中国語の形態素解析において、われわれが用いている手法は、CRF (Conditional Random Fields) による統計的解析である。単語の区切りがない古典中国語においては、単語の区切りとその単語の品詞を、同時に判別する手法が効率的である。すなわち、各単語の出現確率と、隣り合う単語どうしの共起確率を、いずれも品詞情報つきで機械学習しておき、与えられた白文に対して、それらの確率が最も高くなる組み合わせを、CRFを用いて自動抽出するわけである。

古典中国語の依存文法解析において、われわれが用いている手法は、UD (Universal Dependencies) という言語横断的な依存構造記述である。UDは、品詞、形態素属性、依存構造情報を、言語に依存せず記述し、句構造を考慮せずに係り受け関係を記述できるよう、全ての構文構造を単語間の依存関係で記述するのが特徴である。言語に依存しない手法であるため、機械学習においても他の言語でのアイデアが、ある程度は流用できる。ただ、文と文の間に区切りがない、という古典中国語の特徴は、他の現代的な言語とは大きくかけ離れており、その点に関しては独自手法の開発を迫られている。

われわれは、すでに四書(孟子・論語・大学・中庸)の形態素コーパスと依存文法コーパスを完成しており、これらを機械学習用のコーパスとして利用できる。また、これらのコーパスを、カレル大学との国際共同プロジェクトにより、全世界に発信している。いわば「四書を学んだ人工知能」を生み出すべく、われわれの研究の発展に期待されたい。

漢文の形態素解析・依存文法解析・直接構成鎖解析



ブラフマニズムとヒンドゥイズム 南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性

班長 藤井正人

ブラフマニズム(パラモン教)は、ヴェーダ文献に基づく宗教儀礼と生活・社会規範を含む古代インドの支配的宗教体系である。その後の仏教やジャイナ教など、ヴェーダに基づかない非正統派の宗教の成立と前後して、ブラフマニズムの内部および周辺から、新しいタイプの信仰形態、宗教思想、宗教儀礼をもつヒンドゥイズム(ヒンドゥー教)が形成されていった。しかし、ブラフマニズムはヒンドゥイズムへと移行・解消したのではなく、両者はインドの社会と宗教の二つの基軸として時代を通して現代に至るまで並存し、混淆し、互いに影響を与え合ってきている。課題名を「ブラフマニズムからヒンドゥイズム」ではなく「ブラフマニズムとヒンドゥイズム」としたのは、そのことを強調するためである。本研究は、ブラフマニズムとヒンドゥイズム、およびそれらと距離をおきながらも共存してきたその他の宗教との通時的および共時的関係に関する研究を通して、南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性を解明することを目的としている。

この課題のために、インド学、仏教学、言語学、歴史学、人類学など南アジアの文化・宗教・社会に関する多くの分野の研究者が集まり、さまざまな角度から研究を進めながら、得られた知見を班全体で検討し共有することによって研究の拡大と深化をはかっている。具体的な活動としては、研究期間を半年のクールに分け、クールごとに特定のテーマを設定して研究会を重ね、各クールの終わりにそのテーマに関するシンポジウムを開催している。第1クール(2016年度前期)では「知の深化と拡大」、第2クール(2016年度後期)では「禁欲・苦行・出家」、第3クール(2017年度前期)では「神話・説話・表象」、第4クール(2017年度後期)では「儀礼・制度・社会」、第5クール(2018年度前期)では「哲学と学問」、第6クール(2018年度後期)では「王権と宗教」というテーマで研究会とシンポジウムを開催した。最終年度(2019年度)はクールに分けずに研究の補完と

集成を行い、年度末に総括のための最終シンポジウムを計画している。研究成果としては、各クールのテーマをもとに、古代・中世インドの社会と宗教に関する複数巻の論文集を出版する予定である。



第6回シンポジウム(東京大学で開催)ポスター

『文史通義』研究

班長 古勝隆一

『文史通義』研究班は会読形式の研究班で、清代の学者、章学誠(1738-1801)の著書、『文史通義』を、班員が力を合わせて読解してゆき、訳注を完成させることを目標として、2015年4月に会を組織し、今日に至る。

人文科学研究所の研究班には、班員の研究発表を中心とし、論文集の刊行をめざすものなど、会読以外の形式もあるが、私が班員の皆さんを募って研究班を主宰する機会があれば、ぜひ会読をしてみたいと、ずっと思ってきた。1998年以来、私は人文研の研究班に参加してきたが、何より勉強になったのは、吉川忠夫先生、麥谷邦夫先生といった、研究所の先達が組織・運営してこられた会読形式の研究班であった。

文言文で書かれた中国の古書には、なかなか独力では読み難いものが多く、複数の専門家、それも複数分野の専門家が協力して読書することに、実質的な効果があるものと確信している。しかし、「では、共同研究として何を讀むか」となると、これは頭を悩ませる問題であった。思いついたのが『文史通義』であった。その書名に「文」と「史」とが含まれており、中国学術の広い部分を覆う著作であるから、文学・歴史学の専門家にも興味を持って参加してもらえるものと期待し、これを選んだというわけである。ただ実のところ、自分の専門とやや離れていることもあり、着手前には不安もあった。何人かの方に相談したところ、「よいのではないか」という反応をいただいたので、この本を読むことに決めた。

会読に大切なのは、何よりもメンバーである。この研究班は、幸いメンバーにめぐまれ、手前味噌かもしれないが、当初の期待通り、十分に踏み込んだ読解ができているものと思う。かつて私は、目録学の観点からこの本を読んできたが、それ以外にも議論すべきことが様々あるということに気づかされた。進度は、やや遅めであるが、すでに全体の6割を訳し終えており、4割は『東方学報』に掲載済みである。このまま継続し、全巻(内篇5巻)を訳し、さらに全体にブラッシュアップを加えて完成版を作る予定である。



会読をする研究班員

北朝石窟寺院の研究

班長 岡村秀典

中国山西省にある雲岡石窟は、460年ごろ遊牧国家の北魏によって造営された仏教寺院である。中国三大石窟のひとつであり、2001年にユネスコの世界文化遺産に登録されている。本研究の前身である東方文化研究所は1938-44年に東西1kmにわたる巨石仏群を悉皆調査し、水野清一・長廣敏雄著『雲岡石窟』全16巻32冊(1951-56年)として日英語版の報告書を刊行した。

当研究所には計1万枚あまりの写真や800枚あまりの拓本が保管されており、そのデジタル化を進めてきた。2010年にはじまった共同研究「東アジア初期仏教寺院の研究」班では、写真データと『雲岡石窟』の図版とを照合し、その解説を会読していった。そのなかで若い班員たちの発案によって原報告16巻32冊すべてのPDFを作成したので、京都大学附属図書館の協力をえて学術情報リポジトリ「KURENAI 紅」に公開した。半世紀以上前に刊行された原報告は、発行部数が少なく、中国での入手が困難であることに加えて、重厚すぎて閲覧には不便であったため、電子版の公開は国内外の研究者から大いに歓迎された。

ほどなくして中国語版を出版したいという要請があったため、日中米国の研究者による最新の学術論文と旧版未収録の写真・拓本類を加えた4巻9冊を増補し、中国社会科学院考古研究所との共同編集による『雲岡石窟』全20巻42冊を出版した(日英語版:2013-17年、中国語版:2014-18年)。

この間、2013-14年度には出版を目的とした「雲岡石窟の研究」班に改組し、編集作業が一段落した2015年からは、北魏が洛陽遷都(494年)後に造営した龍門石窟の研究に照準を合わせ、「北朝石窟寺院の研究」班を立ち上げた。水野清一らは1936年に響堂山石窟(河北省)と龍門石窟(河南省)を調査したが、報告書の水野・長廣著『龍門石窟の研究』(座右宝刊行会、1941年)の中国語版について出版依頼があったほか、人文研には数千枚にのぼる龍門石窟造像記拓本が所蔵され、その整理が喫緊の課題になっていたからである。また、2018年度には中国社会科学院考古研究所の李裕群先生と龍門石窟研究院の焦建輝先生を招聘し、連続セミナーの場で最新の研究成果について意見交換をおこなった。



京都大学人文科学研究所・中国社会科学院考古研究所編『雲岡石窟』全20巻42冊(科学出版社、日英語版:2013-17年、中国語版:2014-18年)

龍門北朝窟の造像と造像記

班長 稲本泰生

中国河南省・洛陽郊外の龍門石窟は、東アジアで最も重要な仏教遺跡の一つである。北魏が洛陽に遷都した5世紀末に造営が始まり、以後開かれた窟龕は2,000余、仏像の数は約11万体に及ぶともいわれる。石に刻まれた造像記の質量においても、龍門は突出した存在である。書の名品として著名な一部の事例に注目が集まりがちだが、総数は2,500件以上に達する。全てが仏像制作によせて人々が遺した貴重な証言であり、歴史・宗教・社会などの領域にまたがる有益な情報を大量に含む。龍門石窟の複雑な造営過程を復元的に跡づけるうえでも、造像記に対する広く深い理解は必須の条件となる。

人文研の前身の一つ、東方文化研究所の水野清一・長廣敏雄は1936年に現地調査を行い、その成果をもとに『龍門石窟の研究』（1941年）を出版した。本書収載の「龍門石刻録」は、人文研の蔵する拓本を駆使して石刻文を集成した空前の成果である。しかし文字資料と造形資料を相互参照できない状況下で研究が進められたため、多くの課題が後考に委ねられた。他方、戦後の中国における考古学の発展により、龍門研究は大きく前進した。しかし開鑿の主体と過程、主要造像の編年など、基本的なところで研究者の見解が分かれる点は、今なお多い。

近年、龍門造像記の拓本多数が、所内で新たに確認されるに至った。当班では目下整理中であるこの資料を活用し、龍門最古の窟である古陽洞を手始めに、北朝時代の造像記の再点検を行っている。毎回の研究会で一点一点について複数の拓本を比較検討し、文面の確認と内容の読解を重ねてきた。参加者には美術史・考古学の専門家が多い。その特長を活かして、文字資料の内容を造像の位置関係や彫刻の造形と照合し、理解を深めることにも注力している。「石刻録」の増補改訂版にとどまらない、より包括的で精度の高い資料集を、研究成果として公刊する予定である。



比丘慧成造像記（人文研蔵拓本、部分）、北魏・太和22年（498年）、龍門古陽洞

共同研究班の班員数とその内訳（2019年度）

共同研究班	(人)				
	所内者	学内者	学外者	大学院生(学外)	大学院生(学内)
課題公募班 A班(4班)	26	5	76	4	4
班員公募班 B班(5班)	31	19	134	2	7
基盤研究班 C班(18班)	98	47	226	16	36
課題公募班 若手A班(5班)	14	3	34	1	3
合計	169	74	470	23	50



共同研究の成果は、昔も今も広く一般に公開している



附属研究施設

東アジア人文情報学研究センター



北白川の閑静な住宅街にたたずむ分館は、東方文化学院京都研究所屋として1930年11月に竣工した。文化庁の登録有形文化財に指定されている。武田五一と東畑健三の設計。スペイン僧院を模したロマネスク様式に東洋風を加味した美しい建物で、随所に趣向を凝らした意匠がみられる。そびえ立つ尖塔に隣接して書庫があり、膨大な漢籍が収納されている。京都の東洋学研究の象徴として名高く、現在は東アジア人文情報学研究センターが使用している

東アジア人文情報学研究センターの前身である東洋学文献センターは、日本学術会議の勧告にもとづき、人文科学研究所の附属研究施設として1965年に創立された。東方文化学院京都研究所の創設より収集してきた東洋学関係文献を整理し、研究者の共同利用に供すること、および東洋学に関する学術情報活動を活発に進めることが設置の目的である。なかでも東洋学研究に関する日本、中国、朝鮮、欧文の論文や単行本を分類・配列した『東洋学文献類目』は、1934年版より逐年刊行し、東洋学の道標として国内外の研究者に広く利用されてきた。コンピュータ利用にもいち早く取り組み、『東洋学文献類目』1981年版からは電算処理によりデータベースを作成している。

その成果をもとに、より汎用性のある漢字処理システムを開発し、漢字文献の公開とその国際的情報交換をいっそう活発に進めるため、2000年に漢字情報研究センターに改組し、漢籍や甲骨文字、拓本文字などの所蔵資料をデータベース化

した。そのころ、急速な情報社会化によって、従来の文献資料学はIT技術を取り込んだ人文情報学に変容しつつあったことから、2003-08年度には本センターを中核として21世紀COEの「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」を立ち上げた。その活動をさらに発展させるため、2009年には東アジア人文情報学研究センターに改組した。人文研が推進する共同研究の成果をもとに、重層的な研究情報を構築・発信し、人文科学のグローバルな研究拠点として活動する一翼を担いつつ、若手研究者の育成と東アジアの学術コミュニティの創成をめざすのが主な目的である。

周知のように、日本には古代から多数の漢籍が輸入され、全国各地の研究機関や図書館、寺社などに保存されており、いわば日本文化の源泉にもなっている。人文研は創設以来、そうした漢籍を日本ひいては世界の文化資源として整理・活用し、1972年からは文部科学省(旧文部省)との共催により、

スタッフ

センター長 稲葉 穰(兼任)
 センター主任 安岡孝一
 教授 安岡孝一
 WITTERN Christian
 (ウィッテルン・クリスティアン)
 准教授 永田知之
 助教 守岡知彦
 福谷 彬
 助手 梶浦 晋

所員の研究室は、井戸と池のある中庭の周囲に並ぶ



漢籍整理に携わる大学・公共図書館職員を対象として、漢籍担当職員講習会を毎年開催している。このネットワークを利用し、2001年に本センターは国立情報学研究所および東京大学東洋文化研究所附属東洋学情報センターと共同して「全国漢籍データベース協議会」を立ち上げた。現在、協議会には国内の80機関が参加し、本センターのWebサイトで公開している「全国漢籍データベース」の2018年度のアクセス数は7,132万件におよんでいる。

本センター所蔵の漢籍については、その全文画像データベース「東洋学デジタル図書館」を構築し、版本研究における利便性の向上に努めている。また、内藤湖南らが収集した中国歴代石刻拓本については、所蔵する1万点のうち約半数を整理し、拓本全体の画像データベース「石刻拓本資料」と連動させて、1字ずつ画像を検索・比較できる「拓本文字データベース」を構築した。国内外の中国学研究者だけでなく、在野の書道愛好家にまで広く利用されるようになり、2018年度のアクセス数は2,413万件におよんでいる。

人文研の前身である東方文化研究所は1938年から7年間にわたって中国山西省の雲岡石窟を調査し、戦後に『雲岡石窟』全16巻32冊(1951-56年)として日英語版の報告書を刊行した。さらに仏教文化の源流を探るため、京都大学は1959年からイラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊、1970年から中央アジア学術調査隊を組織し、ガンダーラ寺院址やパーミヤーン石窟の考古学的調査を実施した。人文研には雲岡石窟のガラス乾板5,000枚や拓本800枚をはじめ、世界的に貴重な記録類が多数保管されており、その整理と公開を進めている。

人文研の共同研究班では、手はじめに『雲岡石窟』全32冊のPDFを作成し、京都大学附属図書館の協力をえて学術情報リポジトリ「KURENAI 紅」に公開したところ、中国の出版社から翻訳出版の提案があり、原報告未収録の写真・拓本を増補し、中国社会科学院考古研究所との共同編集による『雲岡石窟』全20巻42冊の出版が実現した。また、京都大学の調査後に爆破の憂き目に遭ったパーミヤーン石窟については、大仏の精細な写真測量図や壁画のカラーズライドを本センターのWebサイトに「西域行記データベース」として公開している。さらには、関連する学術資源を保有するウィーン大学、アフガニスタン国立博物館、UNESCOなどの諸機関と共同で画像データベースを構築する事業を計画している。

国際交流については、台湾国家図書館、本学附属図書館、本センターの3機関で学術交流協定を締結している。そのほか、韓国の高麗大学校民族文化研究院・海外韓国学資料センターと共同で京都大学附属図書館所蔵の朝鮮本漢籍・文書を調査し、ドイツのハンブルク大学アジア・アフリカ研究所と中国の南京大学域外漢籍研究所と共同で「漢籍学の国際化に向けての総合研究」というプロジェクトを推進している。

このほか90年におよぶ人文研の中国学研究をわかりやすく解説し、漢籍ひいては漢字文化全般に関する理解を深めて



鉄骨三層構造の書庫

もらうため、2005年から東京で「TOKYO 漢籍 SEMINAR」を毎年開催している。講演の内容は、研文出版より「京大人文研漢籍セミナーシリーズ」として出版している。

本センター (<http://www.kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>) が現在展開している主要な事業は下記の通りである。

連携事業

全国漢籍データベースの構築

<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki/>

【幹事機関】

- 国立情報学研究所
- 東京大学東洋文化研究所附属東洋学情報センター
- 京都大学人文科学研究所附属東アジア人情報学センター

全国漢籍データベース協議会
<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kansekiyogikai/>

単独事業

京都大学中央アジア学術調査隊資料

デジタル・アーカイブの構築

定期刊行物

『東洋学資料叢刊』、『センター研究年報』

漢籍担当職員講習会

初級・中級、各年1回5日間

セミナー

1. TOKYO 漢籍 SEMINAR
2. 東洋学へのコンピュータ利用研究セミナー

データベースの構築と公開

東洋学文献類目検索、京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料、拓本文字データベース、京都大学人文科学研究所所蔵甲骨文字、西域行記データベース、東洋学デジタル図書館、所蔵中国雑誌一覧など

データベース一覧 <http://www.kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp/database/>



附属研究施設

現代中国研究センター

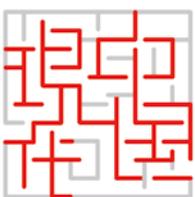


中国の経済的躍進を象徴する上海浦東のビル群

現代中国研究センターは、現代中国についての研究を重点的に推進するとともに、京都大学における現代中国研究者が持続的な共同研究を行うための拠点を構築することを目的として、2007年4月に設置された附属研究施設である。本センターは、大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 (NIHU) が2007年度から2016年度まで、2期10年にわたって実施したネットワーク型研究推進事業 (現代中国地域研究) の京都大学側の実施主体として、一方で国内の他大学拠点と協力しつつ、また学内の関連諸部局 (経済学研究科、文学研究科、人間・環境学研究科、法学研究科、学術情報メディアセンターなど) の教員を兼任などの形で受け入れてきた。NIHUの現代中国地域研究推進事業は、2017年3月をもって終了したが、本センターは、京都大学規程に定められた附属研究センターとして、2017年4月以降も、所外委員を含む運営委員会のもと、活動を継続している (2019年9月時点での教員構成は専任教員2名、所内兼任3名、学内兼任3名)。

本センターが発足した2007年、中国はすでに世界経済の中で大きな位置を占めていたが、その後さらに経済成長を重ね、2010年には経済規模で日本を抜いて世界第2位となり、今や国内総生産 (GDP) は日本の3倍、アメリカと貿易戦争を繰り返すまでになった。中国自体の行方だけでなく、大国化した中国が日本と世界に何をもちたそうとしているのかに、世界が注目している。こうしたなか、日本の中国研究も、現在の中国を分析する新たなアプローチや手法を要請されていると言えるであろう。人文科学研究所をはじめとして、学内の関係諸部局がこれまで蓄積してきた豊富な研究リソースを現代中国研究にも振り向け、かつ学内の研究者が深化させてきた高水準の個別研究を有機的にむすびつける必要があるのではないかと。本センターは、この課題に応えるべく設置された。

一口に現代中国といっても、この巨龍の相貌は複雑かつ多様である。京都大学の中国学が培ってきた人文系研究の厚みを踏まえ、2013年以来、本センターは研究テーマの柱を「中国近現代史の重層構造」とさだめ、現代中国分析の基本的視角としている。重層性の含意は、現在の中国が歴史的に形成されてきたものであり、近現代、さらには前近代の中国の理解なしには、現在の中国も理解できないという認識である。また、人民共和国の体制下において、歴史編纂事業が中国政治の重要な構成要素であったという点でも、歴史と現代中国は切っても切れない関係にある。つまり、人文学研究 (歴史) に強みを持つ京都大学において、過去から現在へ向かう歴史の堆積と、現代から意識的、遡及的に過去 (歴史) を利用しようとする営為の重層性を切り口に、現代中国の総合的解明をめざすということである。



現代中国研究センターのロゴ

スタッフ

センター長 石川禎浩
センター主任 村上 衛

教授

石川禎浩
岩井茂樹 (所内兼任)
籠谷直人 (所内兼任)
池田 巧 (所内兼任)
江田憲治 (学内兼任)
平田昌司 (学内兼任)
劉 徳強 (学内兼任)

准教授

村上 衛 (専任)



愛国主義教育と相まって、湖南の毛沢東生家は、待ち時間 90 分という人気観光地。揃いの紅軍軍装で訪れる参観団も多い

研究体制の面では、二つの共同研究班、すなわち主に近代中国の政治、思想、文化などを主題とする研究班と、社会、経済、制度などを扱う研究班を隔週で開催してきた。現在はそれぞれ「20世紀中国史の資料的復元」（班長：石川禎浩）、「転換期中国における社会経済制度」（班長：村上衛）として組織され、互いに連携して、関連資料の収集、および研究を進めている。2008年の人文研の研究棟の移転以来、本センターは人文研本館4階にのべ300㎡の独自スペースを確保し、収集された諸資料、データベース、地図などを、広く内外の関連研究者の利用に供している。主な設備は以下のとおり。

- 現代中国共同研究室
工具書、データベース利用のためのパソコン端末、会議用テーブル
- 現代中国情報資料集積基地
近現代中国の新聞、新編地方志、地図を收藏。
デジタルマイクログ、フィルムスキャナを備える。
- 所属教員の個人研究室

関連資料

文化大革命時期紅衛兵資料 「鱒澤彰夫コレクション」

鱒澤彰夫氏（元日本大学教授）が網羅的に収集した文化大革命（1966-76年）の関連資料（段ボール箱換算で約150箱）で、とりわけ中国各地の紅衛兵組織によって発行された新聞、雑誌、チラシ、パンフレットは、質・量のいずれの面でも、世界的に極めて貴重な文物資料群である。文化大革命は、中国において「誤って発動され、中国に重大な災難をもたらした10年におよぶ内乱」と結論づけられたため、正常な歴史研究ができないタブーの時代となっているが、鱒澤氏はこの領域の第一次資料を長年にわたって収集し、退職を控え2014年秋に人文研に寄贈された。目下、書籍に相当するもの（1,700点あまり）はすでに整理を終え、書庫に配架されており、他方、ピラやチラシなどは、データベース構築、データ公開をめざして、データ整理とデジタル撮影を進めている。



紅衛兵組織、造反組織が発行した各種新聞、パンフレットなど



中国近現代史の共同研究班、研究者が出版した報告論文集、著作など



所蔵コレクション

人文科学の幅広い分野の調査・研究のために、和・漢・洋の図書をはじめとして、写真・地図・拓本から各種の考古美術資料に至るまで、さまざまな研究資料の収集に努めてきた。ここでは、人文研が所蔵する数多の研究資料のなかから、人文学研究部と東方学研究部それぞれの特色あるコレクションの一端を紹介したい。

人文学研究部

中川文庫

「中川文庫」は、生前、京都大学文学部長、京都国立博物館館長、日本学士院会員等を歴任した故中川久定氏から、京都大学人文科学研究所が2015年に寄贈を受けた洋書・和書、総計約5,800点からなる。中川氏は、京都大学文学部博士課程在学中、桑原武夫班長指揮下の「フランス百科全書の研究」(1952-55年)に参加して以来、デイドロとフランス啓蒙主義の研究に入り、その後フランス留学経験を経て、フランスのアカデミズムにも伍しうる実証的思想史研究を日本で実現することを志した。その遺産の一つが「中川文庫」である。

文庫全体は、大きく洋書・和書の二部に分かれる。洋書の部には、18世紀フランスで刊行された貴重書1,200点余のほか、西洋古代・近世原典復刻版・現代版、西洋近世研究書、西洋近現代原典・研究書、計約3,300点が、和書の部には、思想・文化関係の原典・翻訳書・研究書、計約1,300冊が収められている。18世紀フランス研究関連では、日本では指折りの充実したコレクションであり、桑原人文研の衣鉢を継ぐ、日欧比較思想・比較文化関連の蔵書数も特筆に値する。

なお、貴重書約1,200点については、研究所刊の『京都大学人文科学研究所所蔵 中川文庫貴重書目録』も編纂されている。

「みやこの学術資源」関連コレクション

学術資源とは、学問や文化の担い手とその学問や文化の継承にあたって収集・作成してきた、学知・作品の周縁に位置する資料群のことである。これら多種多様な資料群を分析することによって、現代日本が抱えて立つ知的・学術的基盤がいかに形成されてきたのかを、歴史的背景と関連づけながら明らかにしていくことができる。

とりわけ、このコレクションは、豊かな伝統をもつ京都や京都大学の独自性を視野に入れながら収集されたものであり、①戦前から戦後にかけて収集された関西最大の映画・文化運動史資料、②戦後日本を代表する知識人桑原武夫(1959年-63年に人文研所長。「共同研究」のコンセプトを築いた一人)や梅棹忠夫の資料、③近代京都における社会運動史資料や文化大革命期紅衛兵資料など、貴重な資料群から構成されている。

通常は、私たちには「成果」という形でしか届けられないが、学問や文化はこれら学術資源を収集・分析することで、学問や文化の担い手とその時々に入れたさまざまなメッセージや可能性を引き出し、次世代に継承することができるのである。



日本映画演劇労働組合のポスター



社会民主党演説会のポスター

デイドロは生前に自著を刊行することが少なかったが、中川文庫には、18世紀から19世紀にかけて、この哲学者の名を冠して刊行された全集・著作集が網羅的に収められている。ここに掲げる4種類の全集はその一部で、世界でもこれだけの稀覯本が一箇所に集められているのはきわめて稀だろ

東方学研究所

華北交通写真

人文研には、「華北交通写真」と呼ばれる膨大な量の写真ストックが秘蔵されてきた。華北交通とは、日中戦争期に日本軍占領下の華北地域で交通・運輸などのインフラ整備・運営をおこなった国策会社で、同社が所蔵していた4万点近い宣伝・広報用ストックフォトが「華北交通写真」である。広報目的で撮影されたため、大半は市民生活や沿線風景・風物などの民俗写真で、すでに中国で失われた風習や景観を読み取ることが可能である。一方、戦場を写したものはほとんどない。

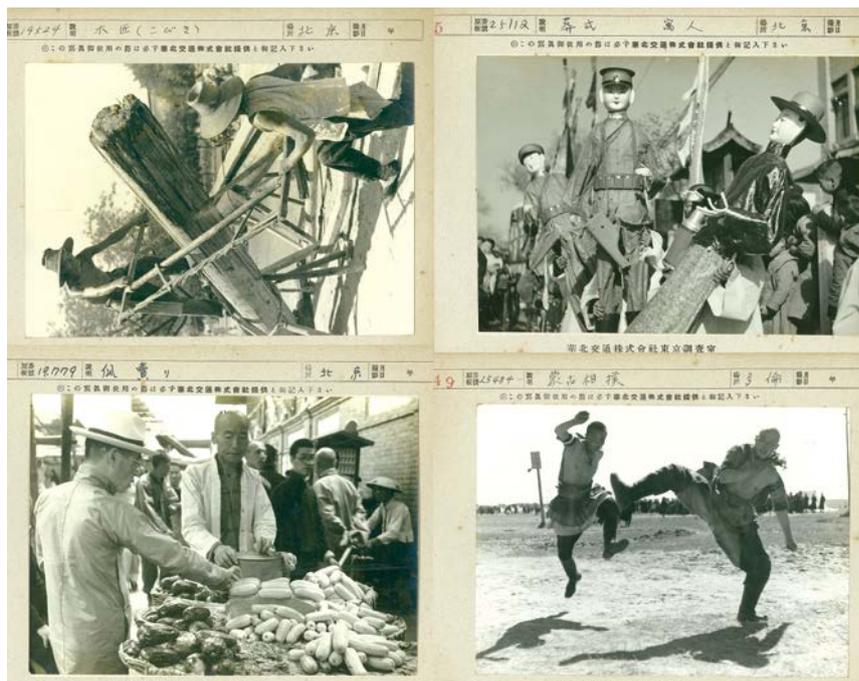
華北交通は、人文研の前身である東方文化研究所が戦中に雲岡石窟の学術調査をおこなったさい、積極的に支援してくれた。それが機縁となり、同社の関係者が戦後にその写真群を人文研の教員に寄託したものと見られる。その存在は、長らく人文研でも一部の教員しか知らなかったようだが、21世紀に入って、内外の研究者による調査・研究が始まった。2011年から逐次デジタル化されてデータベースが構築される一方、近年、東京と京都で展示会がおこなわれた。現在は、人文学オープンデータ共同利用センターの「華北交通アーカイブ」で、全写真を閲覧できるようになっている。

中国石刻拓本資料

中国などの石刻(石に彫られた文字・図像)から採られた拓本も、人文研が前身組織のころから収集に努めた貴重な資料である。分館(附属東アジア人情報学研究中心)に収蔵される拓本は、東洋史家として著名な内藤虎次郎(号は湖南)、桑原隲蔵の旧蔵品三千数百点を含めて膨大な数に上る。

拓本は戦前に集められた「石刻資料」、戦後に得られた「新収石刻資料」、「内藤氏旧蔵拓本」及び「匄齋蔵石記」に区分される。「新収石刻資料」が「桑原氏拓本」など六つに分かれるように旧蔵者は多岐にわたる。また「内藤氏旧蔵拓本」にも清末の高官で匄齋と号した端方の旧蔵品が含まれており、内藤の手を経て人文研に寄贈されたと考えられる。概ね畳んで帙や封筒に納められた拓本は、多くが寄贈品だが、所員が採集・購入した事例も時に見出される。

これらの拓本は日比野丈夫、永田英正、井波陵一が各々主宰した共同研究班で整理・会読の対象となり、成果が公にされてきた。今日ではそれらの文字・画像(元の石刻の時代は漢代から中華民国にまで及ぶ)を検索・閲覧できる拓本文字データベースが公開され、中国学・書法等の諸方面で広く利用されている。



写真の大半は台紙貼りされ、被写体に関する情報がついているものもある



「唐蕃会盟碑(陽及右側)」
(内藤虎次郎旧蔵拓本)



若手研究者の育成

次代の人文学研究をになう研究者の育成のために、これまでに多様な分野にわたる若手研究者を積極的に受け入れてきた。現在、白眉プロジェクト研究者や日本学術振興会特別研究員が在籍するほか、他の研究機関などに所属する若手研究者を人文学連携研究者として受け入れている。

京都大学次世代研究者育成支援事業「白眉プロジェクト」研究者

2009年に発足した京都大学次世代研究者育成支援事業「白眉プロジェクト」は、優秀な若手研究者を年俸制特定教員（准教授、助教）として採用し、最長5年間、自由な研究環境を与え、

自身の研究活動に没頭してもらうことにより、次世代を担う先見的な研究者を養成するものである。人文研では、2011年度以来、10名の研究者を受け入れてきた。

「白眉プロジェクト」研究者（人文科学研究所受入）一覧

氏名	職名	受入期間	研究課題名
村田陽平	特定助教	2011年 4月-2012年3月	人間の感情と社会空間をめぐる「感情の地理学」の基盤的研究
小石かつら	特定助教	2012年 4月-2017年3月	「近代的演奏会」の成立と変遷の総合的実証研究
中西竜也	特定助教	2012年 4月-2016年3月	多言語原典史料による近代中国イスラームの思想史的研究
和田郁子	特定助教	2014年 4月-2016年3月	近世インド海港都市の発展に伴う広域社会の変容に関する史的 research
麥 文彪	特定准教授	2014年 9月-2019年3月	東アジア・東南アジアにおける古代インド天文学の歴史的伝播
上峯篤史	特定助教	2015年 4月-2019年3月	新しい石器観察・遺跡調査・年代決定法に基づく前期旧石器時代史
岩尾一史	特定准教授	2016年10月-2017年3月	7-13世紀の東部ユーラシアにおける国際秩序と外交
別所裕介	特定准教授	2016年10月-2017年9月	中印国境地帯における中国の対ネパール開発投資と「仏教の政治」
天野恭子	特定准教授	2017年10月-	古代インド祭式文献の言語および社会的・文化的成立背景の研究
檜山智美	特定助教	2018年10月-	クチャの石窟壁画の研究を基点とした西域佛教文化の復元的考察

京都大学人文学連携研究者

京都大学人文学連携研究者は、若手研究者をはじめとする人文学の研究者を対象とし、京都大学の図書や施設を利用し、教員と連携して研究をいっそう深化させ、京都大学の「人文知の

未来形発信」の推進に寄与することをめざすものである。人文研では、2018年度から受け入れを開始した。

人文学連携研究者受入一覧

氏名	現職等	受入期間	研究題目
渡辺恭彦	立命館大学政策科学部 社会思想史非常勤講師等	2019年1月-2019年3月	廣松研究を軸にした日本におけるマルクス主義と文明史観の再検討
茶園敏美	立命館大学産業社会学部比較 ジェンダー論非常勤講師等	2019年1月-2021年3月	売春を中心とする戦後日本のセクシュアリティ
沈 恬恬	人文科学研究所研究員等	2019年1月-2019年3月	所有のパラドックス——土地税制改革の視点から考える生という営み
郭 まいか	近畿大学非常勤講師	2019年4月-2021年3月	上海租界会審公廨における日本人の地位に関する研究
田林 啓	公益財団法人 白鶴美術館学芸員	2019年4月-2021年3月	中国甘肅地域における瑞像の顕在化の端緒と機能に関する研究



2010-2019年度

受賞者一覧

人文科学研究所教員の個人研究は学界で高い評価を受けており、これまでに多くの学術賞を受賞している。

日本学術振興会特別研究員

日本学術振興会特別研究員制度は、優れた若手研究者に対して、自由な発想のもとに主体的に研究課題等を選びながら研究に専念する機会を与え、研究者の養成・確保をはかる制度である。人文研では特別研究員を積極的に受け入れており、その人数はこの10年で総計60名におよぶ。

日本学術振興会特別研究員 年度別受入人数一覧(各年度新規)

	PD	DC1・2	RPD
2010	5		
2011	8	1	
2012	7	1	4
2013	5	1	2
2014	3	2	
2015	3	2	1
2016	1	1	1
2017	4		
2018	3	1	
2019	2	1	1
合計	41	10	9



受賞作の一部

2010年度	
井波陵一	第20回蘆北賞
2011年度	
金文京	第9回角川財団学芸賞
宮宅潔	第8回日本学術振興会賞
2013年度	
藤原辰史	第1回河合隼雄学芸賞
菊地 暁	日本建築学会著作賞
菊地 暁	日本生活学会今和次郎賞
2014年度	
井波 陵一	読売文学賞研究・翻訳賞
2015年度	
船山 徹	鈴木学術財団特別賞
2016年度	
富谷 至	第10回白川静記念東洋文字文化賞
2017年度	
田中雅一	第12回日本文化人類学会賞
石井美保	第14回日本学術振興会賞
石井美保	第10回京都大学たちばな賞 (優秀女性研究者賞)
2018年度	
宮 紀子	平成29年度日本学術振興会特別研究員審査会専門委員(書面担当)表彰
宮 紀子	パジュ・ブック・アワード(著作賞)
藤原辰史	第15回日本学術振興会賞
安岡孝一	山下記念研究賞
2019年度	
岡村秀典	第13回白川静記念東洋文字文化賞
藤原辰史	第10回辻静雄食文化賞
藤原辰史	第41回サントリー学芸賞



人文研アカデミー

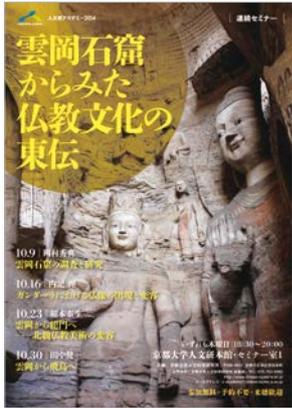
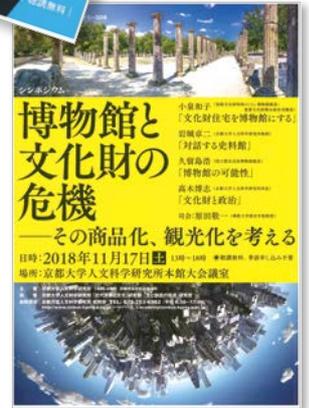
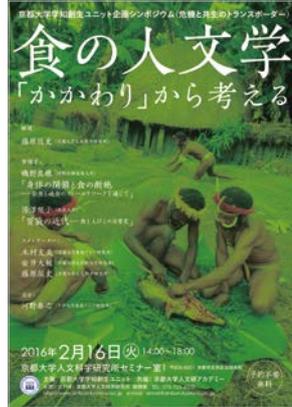
人文科学研究所は従来から夏期公開講座、開所記念講演会、定年退職記念講演会といった一般市民にも公開されるイベントを開催してきたが、2006年4月以降、これらに加えて、共同研究班を担い手とする連続セミナー、時事的なトピックを扱う特別シンポジウム、ライブ演奏と講演とを組み合わせたレクチャー・コンサート等を、「人文研アカデミー」のタイトルの下で実施している。アカデミー発足当初のキャッチフレーズは「知のラビリンスに遊ぶ」、平均して年20-30回のイベントが開催され、多くの聴衆を得ている。

アカデミーの根幹となるのは連続セミナーであり、春と秋に各々4-5回シリーズで共同研究の最新の成果が紹介される。海外からの講演者が登壇することも多く、たとえば、第一次世界大戦開戦100周年にちなんだワークショップには欧米の主導的な大戦研究者5名が一堂に集り、広く注目された。最大の聴衆を集めているのはレクチャー・コンサート、収容力を鑑みて2016年からは京都府立府民ホールALTIを会場としているが、有料イベントであるにもかかわらず、コンスタントに数百名が来場している。また、通常の公開講座とは一味違うヨガ教室や句会、現役の作家を交えた文学カフェ、といった企画も大変に好評である。中高生向けの「ジュニア・アカデミー」も開講され、最近では熊本の高校生とのイベントが毎年恒例となっている。東京で開催されるものも少なくない。さらに、京都生涯学習総合センター（京都アスニー）、NHK文化センター、朝日カルチャーセンター、アンスティチュ・フランセ日本、京都大学総合博物館といった他機関との連携も活発である。

来場者の声の一つを紹介しておく。「人文研アカデミーは、テーマの斬新さ、報告・司会の質の高さ、さらに「誰でも」行けば聞けるという点が独特で、京都大学のオープンな研究会の中でも意義深いところだと思います。今後とも長く続けられますことを願っています。」



2006年から2018年に開催したアカデミーのポスターから抜粋して掲載





教育活動

2019年度の教育活動のうち、人文科学研究所の教員は、文学部・文学研究科では27名、教育学研究科では1名、人間・環境学研究科では4名、アジア・アフリカ地域研究研究科では3名、地球環境学舎では1名が科目を提供している。また、大学院教育にも積極的に携わり、文学研究科協力講座の教員は、教授16名、准教授13名、合計29名に及ぶ。さらに、教育学研究科で1名、アジア・アフリカ地域研究研究科で3名、人間・環境学研究科で1名、総合生存学館で1名が院生指導を行っている。なお、新入生を対象とする「ILASセミナー」にも6科目を提供し、合計9名が関わっている。

人文研の教育活動のなかで特筆すべき点は、研究所の中核活動である共同研究そのものを通じて、学内外の博士課程以上の学生に対する専門的研究能力養成の場を提供していることである。学内外、国内外の幅広い専門家が集う共同研究の場で、先進的な研究や精緻なテキスト会読に参加し、多角的な討論の輪に加わる機会を用意することこそは、大学院教育の枠を超えた人文研独自の若手研究者育成機能といえるであろう。

社会貢献

人文研では、研究所の共同研究や個人研究の成果を広く社会に還元する活動として、2006年度から2018年度まで、ほぼ毎年、京都市生涯学習総合センター（京都アスニー）の講座「ゴールデン・エイジ・アカデミー」の枠内において、同センターとの共催・連携で、セミナーを実施してきた。また、2017年度から朝日カルチャーセンター京都教室と提携し、「人文学への誘い～京都大学人文科学研究所協力講座」を開催している。

「ILASセミナー」担当教員一覧（2019年度）

池田 巧	アジアの文字論
伊藤順二	ことばの歴史・言語学の歴史
立木康介	フランス学に触れる
森本淳生	フランス学に触れる
福家崇洋	ファシズムについて
藤原辰史	ファシズムについて
瀬戸口明久	科学技術を考える——人文学の視点から
菊地 暁	民俗学ゼミ
高井たかね	中国の伝統的室内装飾



身近な話題をもちいて講義を展開する



講義形式の授業でも、学生と対話するしかけをおりませる



文学部3回生の授業風景



「TOKYO漢籍SEMINAR」は、毎年3月に東京で開催される一般向けの講演会である。初回は2005年、当時の漢字情報研究センター（現・東アジア人文情報学研究センター）の主催で、「漢籍はおもしろい」というテーマのもとに開かれた。2011年に東日本大震災が発生した際には、3月12日の開催を取りやめたが、それ以外は滞りなく続けられてきた。これはひとえに聴者の皆さんのおかげである。

人文科学研究所東方学研究部の所員が取り組んでいる研究の成果を紹介すべく、東京で一般向けの講演会を開くという構想は、現在名誉所員となられた井波陵一先生が立案され、長年に

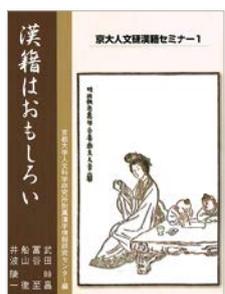
わたって計画を立て、実施してきたものである。井波先生の退職後は、センターのスタッフが企画・運営し、2019年には第14回を迎えることができた。

このセミナーは、一般向けの講演会でありながら、その内容は本格的である。講演者は相当に専門的かつ新しい見解を惜しみなく披露し、聴講者の側も熱心に耳を傾ける。継続的に来てくださる方が多く、しかも年齢も性別も多様である。このセミナーが未長く続けられることを願っている。

講演の内容は、「京大人文研漢籍セミナー」シリーズと銘打って、研文出版よりこれまで8冊を出版している。

「TOKYO漢籍SEMINAR」開催記録

第1回 2005 3.12	漢籍はおもしろい 富谷 至「書写の文化史」／船山 徹「漢訳仏典の成立」／井波陵一「使えない字——諱と漢籍」	第8回 2013 3.19	清華の三巨頭——新しい中国学の始まり 井波陵一「王国維——過去に希望の火花をかきたてる」／古勝隆一「陳寅恪——教授の教授“その生き方”」／池田 巧「趙元任——見えざることを描き出す」
第2回 2006 3.11	三国鼎立から統一へ——史書と碑文をあわせ読む 宮宅 潔「魏・蜀・呉の正統論」／井波陵一「漢から魏へ——上尊号碑」／藤井律之「魏から晋へ——王基碑」	第9回 2014 3.17	木簡と中国古代表 富谷 至「中国西北出土木簡概説」／目黒杏子「年中行事における官と民」／土口史記「木札が行政文書となるとき」
第3回 2007 3.10	陽關以西——漢籍資料から見た西方世界 高田時雄「大唐西域記の成立」／岩尾一史「唐蕃會盟碑への道」／稲葉 穰「漢籍資料から見た唐代アフガニスタン」	第10回 2015 3.16	清玩——文人のまなざし 岡村秀典「古鏡清玩——宋明代の文人と青柳種信」／高井たかね「李漁の「モノ」がたり——「閒情偶寄」居室・器玩部より」／稲本泰生「利他と慈悲のかたち——松本文三郎の仏教美術観」
第4回 2008 3.7	儒・仏・道の經典観——唐代の宗教と書物 麥谷邦夫「玄宗と三教——「孝経」「道徳真経」「金剛般若経」注の撰述をめぐる」／齋藤智寛「大乘菩薩戒の道——『梵網経』と東アジア仏教」／古勝隆一「隋唐の学界における孔安国」	第11回 2016 3.14	目録学に親しむ——漢籍を知る手引き 古勝隆一「漢籍目録を読む——俯瞰の楽しみ」／宇佐美文理「子部書の分類について」／永田知之「目録学の総決算——『四庫全書』をめぐる」
第5回 2009 3.7	漢字文化と西洋近代思想の出会い——梁啓超を中心に 小野寺史郎「民族主義と梁啓超」／石川禎浩「『眠れる獅子』のイメージと梁啓超」／森 時彦「西洋近代経済学と梁啓超」	第12回 2017 3.18	漢籍の遙かな旅路 宮 紀子「モンゴル時代の書物の道」／中砂明德「明末の宣教師が出版した漢籍とキリシタン版」／矢木 毅「漢籍購入の旅——朝鮮後期知識人たちの中国旅行記をひもとく」
第6回 2010 3.13	罪と罰——伝統中国における法と裁判 宮宅 潔「神の裁きから人の裁きへ——秦漢時代の裁判制度」／辻正博「礼教の刑罰——流刑」／岩井茂樹「お上を訴える——訴訟文書と『絲絹全書』」	第13回 2018 3.12	中国近代の巨人とその著作 村上 衛「士の「家計簿」——曾國藩の著作より」／森川裕貴「蒋介石と『中国の命運』」／石川禎浩「毛沢東——書家として、詩人として」
第7回 2011 9.2	俗書の啓蒙力 永田知之「書儀——中世の文章作成マニュアル」／山崎 岳「善書——華僑・華人の人生訓」／武田時昌「日用類書——庶民生活の科学知識」	第14回 2019 3.11	仙という概念装置 武田時昌「仙薬——延年益寿のアルケミー」／土屋昌明「仙界——『幽明録』にみえる洞窟のはなし」／大形 徹「仙術——飛行する仙人」



「京大人文研漢籍セミナー」シリーズ



出版物・著作

人文科学研究所の出版物は、定期的に刊行される「紀要」と不定期に出版される研究報告に分けられる。「紀要」には、邦文の『東方学報』、『人文学報』と、欧文の『ZINBUN』がある。1931年に創刊された『東方学報』は、毎年1冊以上発行し、現在93冊に至っている。東方学研究所員と共同研究班員の論文を掲載し、日本の東洋学界を代表する雑誌のひとつといえるだろう。旧人文科学研究所からは戦前に『東亜人文学報』、戦後は『人文科学』を刊行していた。1950年以降、旧日本部と旧西洋

部所員や共同研究班員の研究発表誌として『人文学報』を刊行しており、現在までに113号を数える。また、1957年から欧文紀要『ZINBUN』が加えられ、現在48冊に達している。

不定期刊行物としては、所員の個人研究と共同研究班の研究報告があり、旧東方文化研究所の創設以来刊行された報告書の数は約250にのぼる。このほか、イラン・アフガニスタン・パキスタンの学術調査報告や、38冊に及ぶ内外調査の報告書がある。

共同研究班の成果刊行物

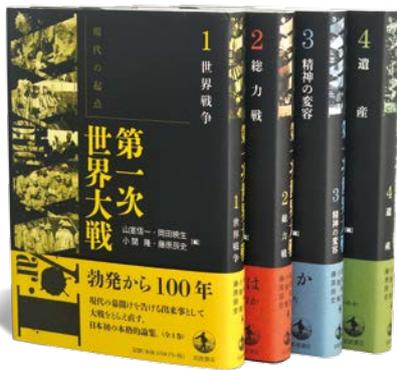
2011		現代の起点 第一次世界大戦3 精神の変容 (岩波書店)	山室信一・岡田暁生・小関 隆・藤原辰史編
陰陽五行のサイエンス 思想篇	武田時昌編	現代の起点 第一次世界大戦4 遺産 (岩波書店)	山室信一・岡田暁生・小関 隆・藤原辰史編
三教交渉論叢 続編	麥谷邦夫編	2015	
敦煌写本研究年報 第5～10号 (2011-16)	高田時雄編	現代中国文化の深層構造	石川禎浩編
カブラの冬——第一次世界大戦期ドイツの飢饉と民衆 (人文書院)	藤原辰史著	漢簡語彙考証 (岩波書店)	富谷 至編
複合戦争と総力戦の断層——日本にとっての第一次世界大戦 (人文書院)	山室信一著	漢簡語彙 中国古代木簡辞典 (岩波書店)	京都大学人文科学研究所簡牘研究班編
葛藤する形態——第一次世界大戦と美術 (人文書院)	河本真理著	雲岡石窟 第2期 全9巻 18冊 (科学出版社)	岡村秀典総監修
表象の傷——第一次世界大戦からみるフランス文学史 (人文書院)	久保昭博著	近代東亜訳概念的発生与伝播 (社会科学文献出版社 (北京))	石川禎浩・狭間直樹編
RACIAL REPRESENTATIONS IN ASIA (Kyoto University Press)	Yasuko Takezawa (ed.)	2016	
コンタクトゾーンの人文学 第1巻 問題系 (晃洋書房)	田中雅一・船山 徹編	近現代中国における社会経済制度の再編	村上 衛編
コンタクトゾーンの人文学 第2巻 物質文化 (晃洋書房)	田中雅一・稲葉 穰編	現代思想と政治——資本主義・精神分析・哲学 (平凡社)	市田良彦・王寺賢太編著
共同研究 ホルノグラフィー (平凡社)	大浦康介編	シナ=チベット系諸言語の文法現象1 名詞句の構造	池田 巧編
2012		東アジア仏教美術における聖地表象の諸様態	稲本泰生編
ことばの力——あらたな文明を求めて (京都大学学術出版会)	横山俊夫編著	人種表象の日本型グローバル研究	竹沢泰子編
眞諦三蔵研究論集	船山 徹編	第一次世界大戦を考える (共和国)	藤原辰史編
マンダラ国家から国民国家へ——東南アジア史のなかの第一次世界大戦 (人文書院)	早瀬晋三著	人種神話を解体する1 可視性と不可視性のはざま (東京大学出版会)	斉藤綾子・竹沢泰子編
コンタクトゾーンの人文学 第3巻 宗教実践 (晃洋書房)	田中雅一・小池郁子編	人種神話を解体する2 科学と社会の知 (東京大学出版会)	坂野 徹・竹沢泰子編
2013		人種神話を解体する3 「血」の政治学を越えて (東京大学出版会)	川島浩平・竹沢泰子編
長江流域社会の歴史景観	森 時彦編	センター研究年報2015年 (特集 漢籍リポジトリ)	ウィッテルン・クリスティアン編
伝統中国の庭園と生活空間——国際シンポジウム報告書	田中 淡・高井たかね編	2017	
近代東アジアにおける翻訳概念の展開——京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター研究報告	石川禎浩・狭間直樹編	〈ポスト68年〉と私たち——「現代思想と政治」の現在 (平凡社)	市田良彦・王寺賢太編著
フィクション論への誘い (世界思想社)	大浦康介編	日本の文学理論——アンソロジー (水声社)	大浦康介編
近代日本の歴史都市——古都と城下町 (思文閣出版)	高木博志編	古典解釈の東アジア的展開	藤井 淳編
捕虜が働くとき——第一次世界大戦・総力戦の狭間で (人文書院)	大津留厚著	フェティシズム研究——第3巻 侵犯する身体 (京都大学学術出版会)	田中雅一編
戦う女、戦えない女——第一次世界大戦期のジェンダーとセクシュアリティ (人文書院)	林田敏子著	2018	
戦争のつぼ——第一次世界大戦とアメリカニズム (人文書院)	中野耕太郎著	近代天皇制と社会 (思文閣出版)	高木博志編
隣人が敵国人になる日——第一次世界大戦と東中欧の諸民族 (人文書院)	野村真理著	トラウマ研究1 トラウマを生きる (京都大学学術出版会)	田中雅一・松嶋 健編
コンタクトゾーンの人文学 第4巻 ポストコロナル (晃洋書房)	田中雅一・奥山直司編	チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開	岩尾一史・池田 巧編
フィクション論への誘い——文学・歴史・遊び・人間 (世界思想社)	大浦康介編	日本宗教史のキーワード——近代主義を超えて (慶應義塾大学出版会)	大谷栄一・菊地 暁・永岡崇編
二十世紀中国的社会与文化 (社会科学文献出版社 (北京))	石川禎浩編	2019	
2014		シナ=チベット系諸言語の文法現象2 使役の諸相	池田 巧編
術数学の射程——東アジア世界の「知」の伝統	武田時昌編	〈68年5月〉と私たち——「現代思想と政治」の系譜学 (読書人)	王寺賢太・立木康介編
フェティシズム研究——第2巻 越境するモノ (京都大学学術出版会)	田中雅一編	われわれはどんな「世界」を生きているのか——来るべき人文学のために (ナカニシヤ出版)	山室信一・岡田暁生・小関 隆・藤原辰史編
アフリカを活用する——フランス植民地からみた第一次世界大戦 (人文書院)	平野千果子著	人文学宣言 (ナカニシヤ出版)	山室信一編
現代の起点 第一次世界大戦1 世界戦争 (岩波書店)	山室信一・岡田暁生・小関 隆・藤原辰史編	トラウマ研究2 トラウマを共有する (京都大学学術出版会)	田中雅一・松嶋 健編
現代の起点 第一次世界大戦2 総力戦 (岩波書店)	山室信一・岡田暁生・小関 隆・藤原辰史編	天と地の科学——東と西の出会い	武田時昌・Bill Mak 編



**シリーズ
人種神話を解体する
(全3巻)**

竹沢泰子(編集代表)、齊藤綾子、坂野 徹、川島浩平(各巻編集)
東京大学出版会、2016

人は、いかなる社会的条件の下で、人を異なる種として分類し、名指し、「差異」と「差別」を創っていくのか。2011年から取り組んできた国際・学際的共同研究「人種表象の日本型グローバル研究」プロジェクトの到達をしめすシリーズ。いまも平等社会の実現を阻み続けている人種差別の解明に向け多分野の研究者が執筆する。



**現代の起点
第一次世界大戦(全4巻)**

山室信一、岡田暁生、小関 隆、藤原辰史(編)
岩波書店、2014

第一次世界大戦は、世界の一体化を推し進め、社会のすべてを動員しようとし、人びとの精神のありようを根底から変えてしまった、史上初の「世界戦争」だった。勃発から100年——現代の幕開けを告げる出来事としての第一次世界大戦を「世界性」、「総体性」、「感性」、「持続性」という四つの新たな視点から問い直す、日本初の本格的論集。



**モンゴル時代の
「知」の東西(上・下)**

宮 紀子
名古屋大学出版会、2018

バジュ・ブック・アワード著作賞受賞作。日本からヨーロッパまで——、世界史上、空前のレベルで展開したユーラシアを貫く「知」の交流。百科事典や辞書・地図から宗教・政治・経済の諸制度まで、モンゴル帝国によるダイナミックな革新と統合の実像を、多言語の文献・美術品・出土文物を駆使して描き出す記念碑的労作。

**仏典はどう漢訳されたのか
——ストラが経典になるとき**

船山 徹、岩波書店、2015

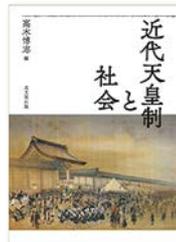
日本印度学仏教学会・鈴木学術財団特別賞受賞作。後漢時代から北宋までの1000年にわたって、インドで成立した仏典はどのように漢訳されたのか。中国には存在しなかった概念はどのように翻訳されたのか。漢字圏の仏教文化を深層から理解したい読者にも、翻訳の可能性と不可能性に関心を持つ読者にも広く読まれるべき、この分野初の概説書。



近代天皇制と社会 高木博志(編)

思文閣出版、2018

天皇が国家の頂点に立った近代、天皇制は人びとにどのように受け入れられていったのか。社会における受容のありよう、権威を高めていった顕彰という行為の具体的検証を通して、天皇不在の社会へ天皇制が浸透していく過程を描き出す。明治維新から戦後まで、現代の象徴天皇制へとつながる近代天皇制を「社会」をキーワードに検討する意欲作。



**京大人文研東方学叢書(7)
理論と批評 古典中国の文学思潮**

永田知之、臨川書店、2019

「道徳・倫理を離れた文学に価値はない」。儒教の枠組みのなかで多分に建前として語られるこうした言説は、時代に伴い多様化する作品と、詩や文章の技法論とに結びつき、複数の潮流を為す文学論を生み出す。紀元前から20世紀前期まで、文学の系譜をたどる。魅力的なラインナップで好評の「京大人文研東方学叢書」の一冊。



**海の近代中国——福建人の活動と
イギリス・清朝** 村上 衛

名古屋大学出版会、2013

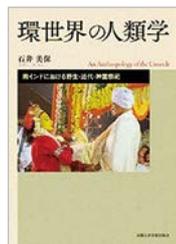
貿易、海賊・海難、移民など、清末中国の「海の歴史」に注目し、福建人の活動とイギリスの役割を焦点に、漢文・英文史料を博捜することで、アヘン戦争の再定義を含め、中国を新たな時代へと突き動かした力を多角的に明らかにする。海と陸、近世と近代を接続し、歴史像を刷新した労作。



**環世界の人類学——南インドにおける
野生・近代・神霊祭祀** 石井美保

京都大学学術出版会、2017

第14回日本学術振興会賞対象作。絶え間ない変化の中で、神霊の力に満たされた野生の領域とのつながりを創りだしてきた南カナラの人々。顕在と潜在の間を往来するその営みに焦点を当て、人々とその環世界の生成と変容の過程を描きだす。人間と野生の力との出逢いと交渉をダイナミックに描いた、エスノグラフィの白眉。



**韓国・朝鮮史の系譜——民族意識・領
域意識の変遷をたどる** 矢木 毅

塙書房、2012

古朝鮮から高句麗・百濟・新羅の三国の時代、さらに統一新羅、高麗、朝鮮王朝、大韓帝国へといたる歴史のなかで、朝鮮半島と中国大陸との間で繰り広げられた、高句麗・渤海、女真人・満洲人など、さまざまな国家や民族の興亡をとらえて、今日の韓国・朝鮮につながる「民族」や「領域」の意識の形成過程を描きだす。



給食の歴史 藤原辰史

岩波書店、2019

第10回辻静雄食文化賞受賞作。小中学校で毎日のように口にしてきた給食。子どもの味覚に対する権力行使の側面と、未来へ命をつなぐ新しい教育を模索する側面。給食は、明暗二面が交錯する「舞台」である。貧困、災害、運動、教育、世界という五つの視点から知られざる歴史に迫り、今後の可能性を探る。



本館

人文科学研究所本館は、吉田本部構内の北、今出川通りに面してある、地下1階・地上4階建ての建物である。地下部分は工学部が使用し、地上部分の一部は工学部の講義室および数理解析研究所の研究室となっている。東アジア人文情報学研究センターを除く人文研の全教員の研究室、事務室、図書室をはじめ、研究会を開催するためのセミナー室、特別研究員・外国人研究員などの研究室、新たな研究に必要なスペースなどが設けられている。また、館内には人文研の附属施設の現代中国研究センターも併設されている。

図書室

人文研の蔵書は2019年3月31日現在63万5,887冊、そのうち人文学研究部・東方学研究部の和書・洋書が本館に、東方学研究部の漢籍・中国書が分館(附属東アジア人文情報学研究センター)に所蔵されている。これまでの共同研究のテーマとのかかわりで、人文学研究部には明治維新、第一次世界大戦後の社会・労働問題、第二次世界大戦期の諸問題や家族問題関係の書籍が多く、18-19世紀のフランスに関する文献も集まっている。最近では、フランス文献の更なる充実に加え、映画・演劇関係資料の収集などにも注意が向けられている。

東方学研究部の蔵書は旧東方文化研究所と旧人文科学研究所の漢籍が主軸で、旧中国関係の文献の収蔵では世界有数の質・量を誇る。民国時代の蔵書家陶湘氏の旧蔵漢籍約2万8,000冊を中核とし、とくに叢書が完備している。研究に直接役立つことを指標に、貴重書よりも信頼できる版本を網羅的に補充する方針がとられ、1948年には旧東方文化研究所の漢籍総数が9万7,000冊に達した。統合により旧人文科学研究所の漢籍4万7,000冊を加え、その後も鋭意充実にも努めている。

文庫として、村本文庫、中江文庫、松本文庫、内藤文庫、矢野文庫、サン＝シモン、フォーリエ文庫、桑原文庫、田中峰雄文庫、安文庫、河野文庫、「バリ五月革命」文庫(西川文庫)、中川文庫等がある。人文研の2019年3月31日現在の蔵書数の内訳は、和書17万7,013冊、中国書35万8,088冊、洋書10万786冊であり、また逐次刊行物の所蔵タイトル数は、和文5,798種、中文2,670種、朝鮮・韓国文288種、欧文1,738種である。

図書の整理(分類)は、和洋書および主として辛亥革命以後の中国書については日本十進分類法により、漢籍を中心とする蔵書は、経・史・子・集の四部のほかに、叢書部を加えた五部分類法によっている。

本図書室も国立情報学研究所の主管する「学術情報ネットワーク」に参加しており、和洋書について、端末機を使って目録を作成し、同研究所「総合目録データベース」形成の一翼を担っている。また辛亥革命以後の中国書についても、2002年4月から同様に入力を開始した。

人文研図書室の利用案内・利用規定については、次のURLに掲載している。

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/library0/index.htm>

蔵書統計(年代別内訳)

年	和文	中国文	欧文	計(冊)
1955	22,837	58,974	1,201	83,012
1967	45,733	187,650	21,573	254,956
1975	64,167	214,231	31,866	310,264
1986	97,150	265,239	49,623	412,012
1995	122,470	293,732	65,838	482,040
2000	131,630	305,994	73,685	511,309
2010	155,943	331,880	85,700	573,523
2018	177,013	358,088	100,786	635,887

特殊文庫

村本文庫	村本英秀氏(元朝日新聞社員)旧蔵書	漢籍 8,484冊
中江文庫	中江丑吉氏旧蔵書	漢籍 6,037冊・洋書 728冊
松本文庫	松本文三郎氏(京都大学名誉教授)旧蔵書	和書 3,889冊・漢籍 6,471冊・洋書 1,096冊
内藤文庫	内藤虎次郎氏(京都大学名誉教授)旧蔵書	漢籍 1,636冊・和書 100冊・洋書 271冊
矢野文庫	矢野仁一氏(京都大学名誉教授)旧蔵書	和漢洋書 697冊
サン＝シモン、フォーリエ文庫		洋書 211冊
桑原文庫	桑原武夫氏(京都大学名誉教授)旧蔵書	洋書 1,047冊
田中峰雄文庫	田中峰雄氏(甲南大学教授)旧蔵書	洋書 947冊
安文庫	安秉珪氏(朝鮮史研究者)旧蔵書	1,161冊
河野文庫	河野健二氏(京都大学名誉教授)旧蔵書	洋書647冊・和書8冊
西川長夫・祐子旧蔵「バリ五月革命」文庫	西川長夫氏(立命館大学名誉教授)・祐子氏(京都文教大学名誉教授)旧蔵書	和書29冊・洋書 203冊
中川文庫	中川久定氏(京都大学名誉教授)旧蔵書	和書1,320冊・洋書4,653冊



本館



分館



●本館

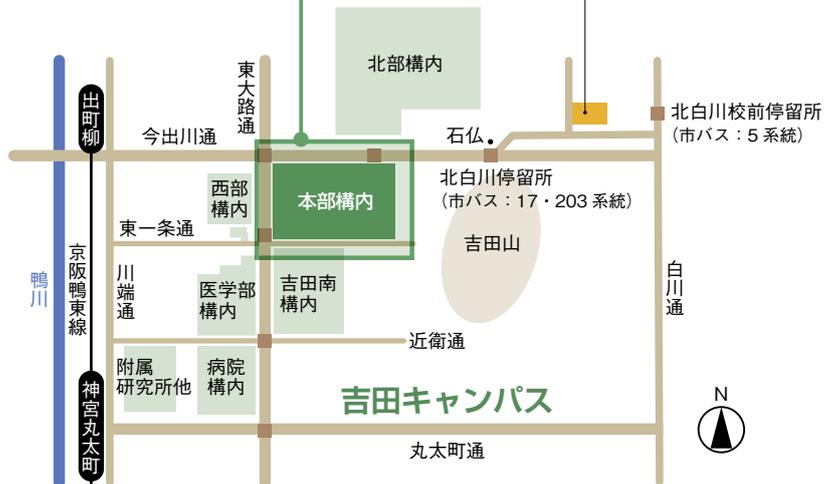
人文科学研究所本館
(総合研究4号館)

〒606-8501
京都市左京区吉田本町
Phone: 075-753-6902
Fax: 075-753-6903
E-mail: annai@zinbun.kyoto-u.ac.jp
http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/

●分館

東アジア人文情報学研究センター

〒606-8265
京都市左京区北白川東小倉町47
Phone: 075-753-6997
Fax: 075-753-6999
E-mail: annai@zinbun.kyoto-u.ac.jp
http://kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp/

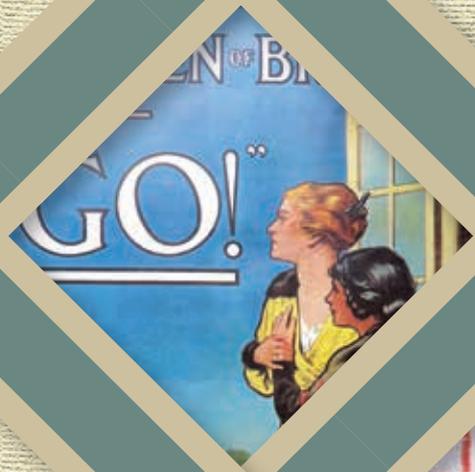


本館へのアクセス

市バス	京都駅 (JR・近鉄) から 17系統 河原町通・錦林車庫行「京大農学部前」下車 206系統 東山通北大路バスターミナル行「百万遍」下車
	河原町駅 (阪急) から 3系統 百万遍・北白川仕伏町行「百万遍」下車 17系統 河原町通 錦林車庫行「京大農学部前」下車 31系統 岩倉操車場行「百万遍」下車 201系統 百万遍・千本今出川行「百万遍」下車
	今出川駅 (市営地下鉄) から 201系統 百万遍・祇園行「百万遍」下車 203系統 銀閣寺・錦林車庫行「京大農学部前」下車
	東山駅 (市営地下鉄) から 31系統 岩倉操車場行「百万遍」下車 201系統 百万遍・千本今出川行「百万遍」下車 206系統 東山通北大路バスターミナル行「百万遍」下車
	出町柳駅 (京阪) から 201系統 百万遍・祇園行「百万遍」下車 203系統 銀閣寺・錦林車庫行「京大農学部前」下車
徒歩	出町柳駅 (京阪) から 徒歩約15分 神宮丸太町駅 (京阪) から 徒歩約20分
タクシー	今出川駅 (市営地下鉄) から 約10分、800円くらい

分館・東アジア人文情報学研究センターへのアクセス

市バス	京都駅 (JR・近鉄) から 5系統 岩倉操車場行「北白川校前」下車 17系統 錦林車庫行「北白川」下車
	河原町駅 (阪急) から 5系統 動物園・岩倉操車場行「北白川校前」下車 17系統 錦林車庫行「北白川」下車 203系統 祇園・錦林車庫行「北白川」下車
	今出川駅 (市営地下鉄) から 203系統 祇園・錦林車庫行「北白川」下車
	出町柳駅 (京阪) から 17系統 錦林車庫行「北白川」下車 203系統 祇園・錦林車庫行「北白川」下車
徒歩	出町柳駅 (京阪) から 徒歩約25分
タクシー	今出川駅 (市営地下鉄) から 約15分、1,000円くらい 出町柳駅 (京阪) から 約10分、800円くらい



京都大学人文科学研究所
www.zinbun.kyoto-u.ac.jp

京都大学人文科学研究所要覧2019
人文科学研究のフロンティア

2019年 11月27日 発行
非売品

編集・発行 京都大学人文科学研究所
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
Phone 075-753-6902

制作協力 京都通信社

デザイン 高坂 均

印刷 株式会社谷印刷所

製本 大竹口紙工株式会社

©京都大学人文科学研究所 2019
*無断転載を禁じます